HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本における前近代サハリン・樺太史研究の動向 : 1264-1867
Author(s)	東, 俊佑
Citation	北方人文研究, 13, 61-97
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77244
Type	bulletin (article)
File Information	13_06_Azuma.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[研究会報告]

日本における前近代サハリン・樺太史研究の動向：1264-1867

東　俊佑
（北海道博物館）

はじめに

日本の歴史学界において、サハリン・樺太という地域を対象とした歴史研究が一つのジャンルとして広く認知されるようになったのは、おおよそ21世紀になってからのことである。そして、2008年7月のサハリン・樺太史研究会の発足は、同地域を対象とした歴史研究の進展を顕著にあらわしている。

ここ十数年、近現代のサハリン・樺太史研究は、個別実証的な論考が数多く生み出され、飛躍的に進展した。しかし、20世紀、とりわけ1980～90年代においては、近現代のサハリン・樺太を対象とした個別論文は数が少なく、むしろ前近代の方が活発であった。13世紀におけるアイヌのサハリン進出と中国元・明王朝のアムール川下流域・サハリン諸民族の支配に関する研究、あるいは中国清朝の辺民制度とサンタン交易に関する研究、及びそれに係る「蝦夷錦」の研究などがその代表である。サハリン・樺太だけにとどまらず、その周辺地域であるアムール川下流域やロシア沿海地方、あるいは北海道（松前蝦夷地）とのつながりに着目し、日本史・中国史・ロシア史といった国家史を相対化し、境界をまたいだグローバルな交易活動や人びとの交流を分析する視座が、この期のトレンドであった。この傾向は文献史学のみならず、考古学においても同様であった。そのほか、日本人のサハリン・樺太進出、地図作製史、絵画史、アイヌ文化史、日露関係史などの分野においても、すぐれた業績が蓄積されていった。

サハリン・樺太史研究に関する研究史を振り返ったものとしては、板橋政樹「サハリン・樺太史研究について：領土問題を中心に」（1999）がある。「北方領土問題」に関する研究史を中心に整理したものであるが、「戦前におけるサハリン・樺太史認識の概要と特質」についても触れている。

北海道史研究・北方史研究では、榎森進「北海道近世史研究の諸問題：研究史と当面の課題を中心にして」（1982）が戦前、及び戦後から1970年代の研究動向を総括している。そのほか小林真人「近年の北海道史研究動向（近世）」（1981）は、1970年代後半の動向をテーマごとに分析する。1970年代は、北海道史研究が量・質ともに飛躍的に発展し、日本史全体との関わりを強く意識した研究が進展したと評価されるが（榎森1982）、サハリン・樺太に係る研究への言及はない。その後の1980～90年代の研究動向は、榎森進「研究史の整理と課題」（1988）、菊池勇夫「北方史研究の現状と課題：国家・境界・民族」（1991）、榎森進，菊池俊彦，桑原真人「地方史研究の現状9：北海道上」（1995）、同「地方史研究の現状10：北海道下」（1995）、榎森進「北海道近世史研究の動向：1970年代以降を中心に」（1997）で総括される。この期の研究史整理では、サハリン・樺太の諸民族と大陸との関係やサンタン交易に関する研究が、北海道史研究の動向のなかで言及される点が一つの特

徴と言える。それは取りも直さず、この期におけるサハリン・樺太に関する歴史研究の進展を顕著に示すものである。

日本における前近代サハリン・樺太史研究の動向は、これまで総括されたことがなく、その全貌は、この時期、この地域を対象とした研究者以外には、ほとんど認知されていないのが現状である。そのことは、あたかも前近代サハリン・樺太史研究が停滞、もしくは皆無であるかのような印象すら与えてしまう危険性もある。

本稿では、以上のような問題意識に鑑み、前近代サハリン・樺太史に関する研究動向を整理し、成果を総括することとしたい。なお、筆者の能力には限りがあることから、考古学や古代史の範囲は対象外とし、日本史でいうところの中世、近世に相当する時期に限定させていただくことを予めお断りしておく。また、巻末の文献リストは、各研究者の業績の網羅的な記載を心がけたが、遺漏があるであろうことをご寛恕願いたい。

なお、幕末期（概ね1850-60年代）は、日本史では近代として扱われる傾向にあるが、江戸時代の北海道、及びサハリン・樺太の歴史は、それ以前（近世以前）と連続的に捉えた方が理解しやすいことから、本稿では日本の江戸幕府崩壊＝1867年を下限とする。上限の1264年は、サハリンのアイヌ（骨嵬）がモンゴル軍と交戦したことが中国の歴史書に見える年である。

1．戦前

サハリン・樺太の歴史研究が、日本の歴史研究者の問題関心として本格的に浮上するのは、1905（明治38）年日露戦争後に北緯50度以南の樺太南半分が日本領となった前後である。その後戦前期（～1945年）までは、日本の大陸進出を肯定し、その理論的根拠となるような研究や、日本の権益の及んだ「満洲」と樺太の関係に言及する研究もさかんとなった。代表的なものとして、小川運平『満洲及樺太』（1909）、同『日本ト大陸』（1923）、末松保和『近世に於ける北方問題の進展』（1928）、鳥居龍蔵『黒龍江と北樺太』（1943）などがある。戦前の樺太論については、三木理史「20世紀日本における樺太論の展開」（2008）で整理されているので、詳細は同論考を参照いただきたい。

『満洲及樺太』は、「唐代の樺太と勘察加」「樺太名称考」「蒙古時代の樺太征伐と其遺蹟」「明代の樺太征伐と遺蹟」「現清朝と樺太の各関係」「樺太島に於ける満洲史料の発見」などの章を立て、歴代中国王朝のサハリン島政策について論及する。一方『日本ト大陸』は、「第二篇　樺太」や「第三篇　樺太史伝」において江戸時代以前のサハリン・樺太の歴史や、間宮林蔵、早川弥五左衛門の事蹟について取り上げる。『近世に於ける北方問題の進展』は、日本近世史の問題として、対ロシアをはじめとする列島北方の対外関係を扱い、江戸期の一次文献を駆使しながら、サンタン交易についても論及する。『黒龍江と北樺太』は、鳥居の明治・大正期のサハリン・樺太現地調査の成果や各種論考などを集成したものである。

サンタン交易に関しては、白山友正「山丹交易事情」（1932）、高倉新一郎「近世に於ける樺太を中心とした日満交易」（1939）など、北海道史研究の立場からのものや、文献学的歴史民族学の立場からの洞富雄「山靼貿易とその政治的背景」（1943）がある。

戦前は、サハリン・樺太に進出した日本人に関する研究もさかんであった。幕末期に西海岸ウショロへ進出した大野藩士について研究した高島正『福井県人樺太経営史』（1912）や牧野信之助「幕末諸藩の富強策について：特に越前大野藩の場合」（1928）、サハリン・樺太南部で新たな漁場開設を試みた越後出身の豪農松川弁之助の事蹟をまとめた風間正太郎『贈従松川辨之助君事蹟考』（1916）、1808（文化5）年の会津藩クシュンコタン警備について論じた相田泰三「文化年間に於ける会津藩の

樺太守備に就いて」(1931) は、郷土史研究の立場からのものである。個人の伝記や人物史の類いとしては、西鶴定嘉『樺太探検の人々（樺太叢書 1)』(1939)、伝記学会編『北進日本の先駆者たち』(1941)、南満洲鉄道株式会社・弘報課編『東韃紀行』(1942)、皆川新作『最上徳内（郷土偉人伝選書 3)』(1943) などの著作がある。間宮林蔵は、海峡の「発見」者としてシーボルトに見出されて以来、彼の著作である『東韃紀行』は、アムール川下流域・サハリン諸民族の民族誌として注目されてきた。しかし、戦前期は偉人・英雄視される傾向が強まり、間宮林蔵に関する数多くの著作が作られ、日本国民の戦意高揚の象徴となった。そのような時代背景にあって、洞富雄「樺太探検とシーボルト事件」(1941) は、ヨーロッパで作製された地図や江戸幕府の蝦夷地調査の状況を踏まえてシーボルト事件を考証したものとして注目に値する。また、伝記学会の月刊雑誌『伝記』には、横山健堂、森銑三、皆川新作、赤羽栄一（壮造）などが、最上徳内や間宮林蔵について言及した小論考が多数掲載されており (巻末の文献リストには掲載していない)、今日の人物研究の基礎をなしている。

日露関係についての研究は、平岡雅英『維新前後の日本とロシア』(1934) が海外の諸史料にもとづく実証的研究として注目される。戦前の日露関係史については、平岡雅英著，高野明解説『日露交渉史話』(1982) のなかで、高野明が研究史を整理している。そのほか太田三郎『日露樺太外交戦』(1941) が比較的よくまとまった通史であり、幕末における樺太をめぐる日露領土問題について取り上げている。

地図史の分野では、高倉新一郎，柴田定吉「我国に於ける樺太地図作製史：北日本地図作製史　第 1 報」(1939)、同「我国に於ける千島地図作製史：北日本地図作製史　第 2 報」(1940)、同「我国に於ける北海道本島地図の変遷(1)：北日本地図作製史　第 3 報」(1942) がある。また、アイヌに関するまとまった著作としては、高倉新一郎『アイヌ政策史』(1942) が刊行された。日本人の北方地理認識発達や、殖民政策の視点でサハリン・樺太の事情に論及するが、これは北海道と南樺太、南千島を一体的に捉える北海道の地方史研究であると言える。

北海道史の通史は、河野常吉が北海道史編纂主任として編述した北海道庁編『北海道史　第一』(1918) がその代表である。周知のとおり、同書は北海道の「開道五十年記念事業」の一つとして編纂されたものであるが、歴史を記述する本編は第一冊の刊行のみで終了し（ほか附録が 2 冊刊行)、記述は第六編の「後幕領時代」までとなっている。サハリン・樺太に関しては、「山靼交易」、「樺太の調査」、「樺太島の開発」、「露人の来寇」、「樺太及び満州の探検」、「樺太境界問題及び日露・日英条約」などについての記述がある。その後、牧野信之助を編纂長として 1936（昭和 11）年から刊行された『新撰北海道史』は、『北海道史　第一』の「後幕領時代」以降の歴史も叙述し、北海道史のはじめての通史と評価される。前近代史部分に相当する『新撰北海道史　第二巻：通説一』(1937) の「例言」には、「北海道史第一巻を基本として、全部本掛嘱託高倉新一郎の執筆に係り、其後の新史料、新研究により増補改訂し、文体を改めたるものなり」とあるが、内容は『北海道史　第一』とほぼ同一であった（榎森 1982)。

また、サハリン・樺太に関する前近代部分の通史としては、河野常吉「嗚呼樺太島」(1900) がその最初と評価できる。その後、自治体史として西鶴定嘉『新撰大泊史』(1939)、樺太史の通史としての同『樺太史の栞（樺太叢書 6)』(1941) の刊行は、北海道以南の道府県市町村同様の、樺太における郷土史・地方史研究の芽生えと評価できる。

2．戦後から 1986 年

戦後になると、サハリン・樺太の歴史に関する研究は、戦前に比べ低調となる。

のちに北海道史研究の第一人者と評価される高倉新一郎は、高倉新一郎，柴田定吉「我国における北海道本島地図の変遷⑵：北日本地図作製史　第 4 報」（1952）、高倉新一郎「蝦夷風俗画について」（1953）、同「千島樺太の開発と土人」（1955）、同「北海道地図の変遷補遺」（1956）などで、江戸期のサハリン・樺太の事情にも言及するが、これらは地図作製史、絵画史、アイヌ史の視点からの北海道史研究である。高倉の北海道やアイヌに関する論考は、その後『アイヌ研究』（1966）、『新版アイヌ政策史』（1972）、『アイヌ絵集成』（1973）などに結実する。

人物史については、依然として間宮林蔵に関する研究がさかんで、洞富雄『間宮林蔵』（1960）、赤羽栄一『間宮林蔵：北方地理学の建設者』（1974）、荒井庸夫『間宮林蔵』（1979）、大谷恒彦『間宮林蔵の再発見』（1980）などがある。そのほか、斎藤秀助編『早川弥五左衛門武英』（1953）、吉田武三『松浦武四郎』（1967）、島谷良吉『最上徳内』（1977）などがある。

列島北方の地理認識や地図の研究に関しては、1970 年代に北方領土問題調査会編『北方領土：古地図と歴史』（1971）、梅木通徳『蝦夷古地図物語』（1974）、船越昭生『北方図の歴史』（1976）などが相次いで刊行された。日本における北辺地図作製史研究は、高倉新一郎により戦前から戦後にかけて行われた研究以来さかんではなかったが、船越昭生「シーボルト資料カラフト図に関する若干の検討：“NIPPON”所収図およびシーボルトコレクション図と内閣文庫蔵図との関連において」（1979）は、間宮林蔵の踏査により作製されたとされる地図を再検討した点、船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』（1986）は中国清朝によるアムール川下流域・サハリン調査の結果作製された「康熙図」（皇輿全覧図）が江戸時代の日本人の地理認識に大きな影響を与えたことを論じた点で画期的であった。

人物史、地理研究の双方にまたがる成果として注目されるのは、上原久『高橋景保の研究』（1977）である。同書は、江戸幕府の天文方であった高橋景保とその周辺の人びとの伝記と、高橋景保の天文暦学研究、地理研究、雅楽研究、語学研究について詳細に叙述したものである。サハリン・樺太についても、高橋景保が内外の書物や地図を駆使して「カラフト」と「サガリイン」の関係を考証した研究業績について詳述する。

絵画史・絵師に関する研究では、1808（文化 5）年の会津藩によるカラフト警備の様子を描いた遠藤香村筆「唐太絵巻」について紹介した綱淵謙錠「特別企画　唐太絵巻」（1974）、坂井正喜「『唐太絵巻』・『唐太嶼奇覧』考」（1984）がある。また、佐々木利和「東京国立博物館保管　シーボルト旧蔵「樺太風俗図」について」（1975）は、サハリン諸民族の風俗を数多く描いた「樺太風俗図」の絵師が川原慶賀であることを比定し、間宮林蔵述，村上貞助編『北夷分界余話』の挿絵との対比を行う。

サハリン・樺太やアムール川下流域の諸民族に関する研究では、池上二良「サンタンことば集」（1967）、同「19 世紀なかごろのオロッコ語集：サンタン語・ギリヤーク語をふくむ」（1971）、加藤九祚「間宮林蔵の見たギリヤク族⑴」（1976）、谷澤尚一「安政三年採録のニクブン語彙を繞って：松浦武四郎の「野帳」を中心に」（1980）、加藤九祚『北東アジア民族学史の研究：江戸時代日本人の観察記録を中心として』（1986）などがある。なかでも池上の論考は、言語学の立場から、江戸時代の日本人の調査記録に見える「サンタン人」や「オロッコ」の語を採録・解釈したもので、これまでの研究にない画期的なアプローチであった。また、池上は、「カラフトのナヨロ文書の満州文」（1968）において、サハリン西海岸ナヨロのアイヌ・ヤエンクル（楊忠貞）に中国清朝が与え、北海道大学附属図書館に伝存する満洲語文書（ヤエンコロアイヌ文書＝ナヨロ文書）の分析を行ったが、これはサハリン・樺太史研究において今でも無視できない貴重な成果となっている。

日露関係史では、文化年間のフヴォストフ事件や、幕末期の日露国境交渉のなかのサハリン・樺太に係る研究でいくつかの論考が見られる。前者に関しては、高野明「大槻玄沢遺物フヴォストフ文書考」(1953)、高野明「フヴォストフ文書考」(1964)、郡山良光「フヴォストフ文書の訳文」(1977)、後者に関しては、洞富雄「久春古丹のムラヴィヨフ哨所」(1956)、秋月俊幸「嘉永年間ロシヤの久春古丹占拠」(1974)、同「幕末の樺太における日露雑居の成立過程(1)」(1977)、同「幕末の樺太における日露雑居の成立過程（承前）」(1979）が個別論文である。秋月氏の一連の論考は、日本の一次文献のみならず、ロシア語の文献も用いながら論証している点で、従来の研究とは一線を画している。

日露関係を通史的に叙述したものとしては、吉田武三『北方の空白：北方圏における日本・ロシア交渉史』(1967)、高野明『日本とロシア：両国交渉の源流』(1971)、大熊良一『幕末北方関係史攷』(1972)、渡瀬修吉『北辺国境交渉史』(1976)、中村新太郎『日本人とロシア人：物語日露人物往来史』(1978)、真鍋重忠『日露関係史 1697-1875』(1978)、郡山良光『幕末日露関係史研究』(1980)などが刊行された。このなかで郡山氏の著書は、前述の秋月氏の論考と同様に、ロシア語史料をも用いながら、ラクスマン、レザノフの対日交渉やフヴォストフ事件を考察している点が、従来の研究とは異なる画期的な点である。

本州各地の地方史・郷土史研究の分野においては、村井益男「幕末北蝦夷地場所開拓の一史料：鳥井家文書の紹介」(1960)、吉田森「北蝦夷地に於ける大野藩人の開拓と国防」(1972)、ロバート・G・フラーシェム，ヨシコ・N・フラーシェム「鳥井権之助と加賀藩への意見書」(1980)、中村義隆「松田伝十郎著「北夷談」にみる幕府のカラフト経営」(1984）など、幕末期に北蝦夷地へ進出した越後出雲崎出身の鳥井権之助や大野藩士、あるいは越後鉢崎出身で間宮林蔵と同年にサハリン・樺太を調査した松田伝十郎に関する研究が新潟県、福井県においてそれぞれ進められている。

なお、この期の北海道史に関する動向として注目すべき事象は、1869（明治 2）年の開拓使設置から 100 年目にあたる 1968（明治 43）年を「開道百年」と位置づけ、「開道百年記念事業」の一環として北海道百年記念塔（1970）や北海道開拓記念館（1971）の設置や、北海道の新しい自治体史としての『新北海道史』の編纂がはじまったことである。編纂は、高倉新一郎が北海道史編集所の編集長を務め、構成・編集は林善茂、永田富智があたり、編集長の高倉が閲覧、さらに増補改正を加える形で行われた。しかしながら、サハリン・樺太に関する事項は、それ以前の『北海道史』や『新撰北海道史』同様、ごく断片的に扱われるのみで、北海道史を理解するための一齣にすぎなかった。

一方、1973（昭和 48）年は、北海道史研究にとって画期的な年とされる。すなわち、同年 1 月 15 日に北海道の近世・近代を語る会主催のシンポジウムが開催され、ここで報告した田端宏、佐藤宥紹、関秀志、榎森進、海保嶺夫などの「若手研究者」が、新たな視角でもってその後の近世史研究を牽引する契機となったのである。それは、北海道史が北方史というジャンルに変化する萌芽でもあった。松前藩は幕藩制国家の北の窓口を担う重要な一部と位置づけられ、政治・経済・文化などあらゆる面で北海道と本州のつながりが念頭に置かれるようになり、北海道史は一地方史の枠を脱却する。いわゆる北から日本史を見直すという視座である。しかし、サハリン・樺太に関する研究は、依然として低調で、海保嶺夫「文献史料よりみたる樺太アイヌのミイラ作製について」(1972)、同「近世樺太における鉄器と土器」(1973)、榎森進「ユーカラの歴史的背景に関する一考察：主に邦訳ユーカラを素材に」(1979）などがわずかにあるのみである。

総じて言うならば、戦後から 1980 年代前半は、サハリン・樺太史研究の低成長時代と評価できる。それは、サハリン・樺太史という総体としてのまとまりがなく、またサハリン・樺太史を対象に歴

史研究を行おうとする視座や研究者の問題関心すらほとんど存在しないということである。このような時期において、洞富雄が自身の戦前期の論考をまとめて『樺太史研究：唐太と山丹』（1956）として刊行したこと（のち『北方領土の歴史と将来』（1973）として再刊）や、サハリン・樺太史の通史としてジョン・J.ステファン著，安川一夫訳『サハリン：日・中・ソ抗争の歴史』（1973）が翻訳・刊行されたことは注目に値する。

3．1987～1990年代

1987年から1990年代は、サハリン・樺太の歴史研究を飛躍的に深化させる画期的な論考やテーマが多数出現した時期である。そのテーマの主軸は、サンタン交易と清朝辺民制度、及びそれに係る交易品としての「蝦夷錦」の研究と、サンタン交易前史としての13～16世紀におけるモンゴル・元・明王朝のアムール・サハリン地域への進出と周辺諸民族に対する朝貢交易の実態解明である。

そもそも、こうした研究がはじまったきっかけは、中国遼寧省檔案館所蔵の『三姓副都統衙門檔案』が満洲語から中国語に翻訳され、『三姓副都統衙門満文檔案訳編』（1984）として公刊されたこと、及び中国の研究者によりアムール川下流域の少数民族に対する清朝の辺民制度に関する研究が行われたことである。中国における研究史は、松浦茂「1980年以降の中国における清代東北史研究の新動向」（1988）で詳しく整理されているので、詳細はそちらを参照いただきたい。そして、こうした中国の研究動向と連動した形で、日本において、松浦茂「清朝辺民制度の成立」（1987）が発表されたことは、新しい時代のはじまりであった。

アムール川下流域のデレンに満洲人が渡来し、周辺諸民族との間で朝貢交易が行われていたことは、これまで間宮林蔵の記録など日本側の史料から明らかにされていたが、そもそもこうした仕組みの成り立ちについては、制度を設計・施行した清朝側の史料の事情が不明瞭で、明らかにされてこなかった。同論文は、中国の研究者による研究論文を踏まえ、『三姓副都統衙門満文檔案訳編』などを用いながら、清朝辺民制度の成立事情を考証した画期的な論文であった。その後、松浦氏は、『三姓副都統衙門満文檔案訳編』だけでは、この地域の歴史を明らかにすることが不十分であることを悟り、遼寧省檔案館所蔵の『三姓副都統衙門檔案』や中国第一歴史檔案館所蔵の『寧古塔副都統衙門檔案』などの満文の一次史料の調査を繰り返していく。それ以後、松浦氏は、「リダカとトジンガ」（1991）、「18世紀末アムール川下流地方の辺民組織」（1991）、「間宮林蔵の著作から見たアムール川最下流域地方の辺民組織」（1992）、「十七世紀以降の東北アジアにおける経済交流」（1994）、「18世紀アムール川下流地方のホジホン」（1996）、「17世紀アムール川中流地方の経済活動」（1998）、「清朝のアムール地方統治：清朝が貂皮の徴収に派遣した旗人」（1999）などを次々と発表し、東洋史の立場からアムール川下流域、サハリン・樺太における清朝の少数民族政策の実態を明らかにしていく。これらの論考では、アムール川下流域・サハリンに居住する住民の辺民への編成過程や、組織された辺民の姓や姓長・郷長の名前、清朝への毛皮数百枚の貢納によりサルガン・ジュイ（妻）や蟒袍などの恩賞が下賜されるホジホンの仕組み、住民の貢納した毛皮の枚数や貢納の見返りとして給付された物品（ウリン）の種類や数量などの諸事実が具体的に明らかとなった。

一方、フィールドワーク（現地調査）を基礎とする文化人類学の立場から、ロシア語文献、中国語文献、日本語文献などを駆使しながら、17～19世紀のアムール川下流域、サハリンの諸民族の歴史研究にアプローチしたのが佐々木史郎氏であった。佐々木氏は、「ピウスツキ資料に基づく北サハリンにおける民族関係の研究：サハリン・ギリヤークとアムール・ギリヤーク」（1987）、「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」（1990）、「清朝支配とアムール川

下流域住民のエスニシティ」(1990)、「レニングラードの人類学民族学博物館所蔵の満州文書」(1991)、「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域：レーヴィン、チェボクサロフの「経済・文化類型」と「歴史・民族誌的領域」の再検討」(1991)、「アムール川下流域住民の民族構成の研究に関する覚え書き」(1991)、「18、19世紀におけるアムール川下流域の住民の交易活動」(1997)、「山丹交易と山丹人」(1998）などを次々と発表し、ロシアにおける同地域住民の「民族」比定の過程や、住民間の交易活動の諸側面を明らかにした。アムール川下流域に住むサンタン人が清朝や松前藩・江戸幕府双方とそれぞれ交易活動を行うことで、結果的に日本と中国の物流を結節する役割を担ったことや、サンタン交易がキツネ・テン・カワウソなどの毛皮と中国製絹織物、青玉などの交換を土台とし、結果的に日本、中国双方の社会に大きな影響を与えたことなどが具体的に明らかとなった。また、一般向けの書籍として『北方から来た交易民：絹と毛皮とサンタン人』(1996）が刊行されたことは、サンタン人、サンタン交易の存在を広く普及する役割を担った。

松浦氏の研究は、東洋史の立場で清朝の制度、政策的な側面からのアプローチであるのに対し、佐々木氏の研究は、諸民族の交易活動など、住民の動きに注目したものである。ほぼ同一地域を対象としながら、視点やアプローチの仕方の相違が、研究内容をより豊かにしたと言える。

一方、日本史や北海道史、アイヌ文化史を主に対象としている研究者もサンタン交易やサハリン・樺太住民の歴史に言及している。代表的なものとして、児島恭子「18、19世紀におけるカラフトの住民：「サンタン」をめぐって」(1989)、海保嶺夫「『北蝦夷地御引渡目録』について：嘉永6年(1853)の山丹交易」(1991)、児島恭子「山丹交易とカラフト諸民族の状況」(1995)、海保嶺夫「山丹交易と辺民制度：初期露清関係史の視点より」(1995)、小林真人「松前藩による山丹交易品の独占とその流通」(1995)、矢島睿「山丹交易の研究史とその諸問題」(1995)、榎森進「松花江流域出土の「寛永通宝」、その歴史的背景」(1999）などがある。海保嶺夫氏が紹介した『北蝦夷地御引渡目録』は、サハリン・樺太西海岸の南端にあった松前藩シラヌシ会所の箱館奉行所への引継書類である。同史料の紹介により、シラヌシへ来航したサンタン人の人名や人数、取引されたサンタン交易品の種類や数量が具体的に明らかとなった。また、東洋史の立場からのものとして、間宮林蔵がデレンで出会った満洲役人の家系について論及した中村和之「トジンガの家系について」(1992）などがある。

日本史研究、アイヌ文化研究の立場からの研究としては、サンタン交易自体を対象としたものより、交易品としてサンタン人が蝦夷地へもたらした「蝦夷錦」の流通や物質文化の視角からの研究の方がさかんであった。中村和之「北海道神宮旧蔵『満州古衣』について：蝦夷錦研究覚書(1)」は、現北海道博物館所蔵の「満州古衣」について論じたもので、同「蝦夷錦と山丹交易」(1987）は、北海道内の蝦夷錦の所在状況や流通について考察したものである。その後、ソ連邦の崩壊等により、にわかに「北のシルクロード」への関心が高まり、1990年10月～翌年6月までの北海道新聞日曜版の連載をまとめた北海道新聞社編『蝦夷錦の来た道』(1991）や、東北地方に残る蝦夷錦の所在を知らしめた田中忠三郎監修『佐井村海峡ミュウジアム』(1992）の刊行が相次いだ。1990（平成2）年からは、北海道開拓記念館が「北の歴史・文化交流研究事業」をスタートさせ、矢島睿「山丹交易品蝦夷錦の名称と形態」(1995）などサンタン交易や「蝦夷錦」の研究を主要テーマの一つに据え、特別展として『山丹交易と蝦夷錦』を1996年に開催している。

一方、日本中世史研究においては、北奥以北の蝦夷・アイヌの動向を視野に入れて東北地方の中世史を理解しようとする研究が行われるようになった。日本中世のころの北海道の歴史についても、海保嶺夫『中世の蝦夷地』(1987)、同「北方交易と中世蝦夷社会」(1990)、榎森進『日本民衆の歴史　地域編8　アイヌの歴史：北海道の人びと(2)』などで言及されている。こうした動向に、

さらに新たな視座を提供したのは、榎森進「13〜16 世紀の東北アジアとアイヌ民族：元・明朝とサハリン・アイヌの関係を中心に」（1990）であった。同論文は、中国王朝のアイヌ認識に関する研究史を整理したうえで、モンゴル・元朝と「骨嵬」、アムール川下流域に明朝が設置した奴兒干（ヌルガン）都司とサハリンの衛、さらに同地域住民の朝貢交易の実態を、中国語史料により考察した画期的なものであった。なお、同論文で使用された元のサハリン侵攻を「北からの蒙古襲来」と呼ぶことに対して、ことばの一人歩きを招いてしまうとの批判が、中村和之「「北からの蒙古襲来」小論：元朝のサハリン侵攻をめぐって」（1992）で展開されている。

以後、13〜16 世紀のアムール川下流域、サハリンへの中国王朝の進出や人びとの活動についての関心が急速に高まり、榎森進「周辺諸国と変容するアイヌ社会」（1992）、大石直正「北からの日本中世」（1992）、海保嶺夫「中国と日本列島北部の動向：13 世紀後半〜14 世紀前半を中心に」（1993）、佐々木史郎「北海の交易：大陸の情勢と中世蝦夷の動向」（1994）、榎森進「アイヌ民族と安藤氏」（1995）、同「13〜17 世紀のアイヌ民族と周辺諸国・諸民族」（1996）、中村和之「十三〜十六世紀の環日本海地域とアイヌ」（1997）、同「北の「倭寇的状況」とその拡大」（1999）などの論考において意欲的に言及され、広く認知されることとなった。また、先述した北海道開拓記念館の「北の歴史・文化交流研究事業」のなかでも、この期のサハリン・樺太の歴史に関心が寄せられ、文献の立場から中村和之「「経世大典序録」にみえる果夥について」（1991）、考古学の立場から平川善祥，山田悟郎「「白主土城」の現状について」（1991）など、「白主土城」に関する研究も行われた。

日本近世史研究においても、松前・蝦夷地のみならず、サハリン・樺太やサンタン交易、ロシアとの関係を強く意識した研究が行われるようになる。藤田覚「蝦夷地第一次上知の政治過程」（1987）は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての江戸幕府の蝦夷地直轄の政策決定の過程について論じたものであり、カラフト上知の是非が幕閣内の重要な議題であったことを指摘する。また同「文化三・四年日露紛争と松平定信：松平定信「蝦夷地一件意見書草案」の紹介をかねて」（1996）は、文化 3 〜 4 年にカラフト等で起こったフヴォストフ事件を日本史近世史研究として扱った論考である。また、この期は、境界や領土などをテーマとした研究がさかんで、榎森進「13〜19 世紀の日本における北方地域の境界認識」（1990）、同「日露和親条約と幕府の領土観念」（1992）、麓慎一「幕末における蝦夷地政策と樺太問題：1859（安政 6）年の分割分領政策を中心に」（1993）、同「慶応期における蝦夷地政策と樺太問題」（1994）、同「幕末における蝦夷地上知過程と樺太問題」（1995）、同「幕末の樺太における領土問題と場所請負商人：クリミヤ戦後の樺太開発を中心に」（1998）などは幕末のサハリン・樺太をめぐる国境画定・領土問題やそれにまつわる諸問題を日本史研究の立場から考察したものである。そのほか、経済・流通に関するものとして、北蝦夷地の場所請負人を務めた栖原家の足取りを論述した田島佳也「北の海に向かった紀州商人：栖原角兵衛家の事跡」（1990）や、サンタン交易とワシ羽についても論じた菊池勇夫「鷲羽と北方交易」（1994）などがある。また、日本史研究という立場ではあるが、サハリン・樺太のウショロに住むアイヌ・トコンベの逃亡事件から日本とロシアの「雑居」体制のなかで翻弄されるアイヌの姿を描いた菊池勇夫「幕末日露関係のなかの樺太アイヌ：「出奔土人」トコンベ一件」（1989）は、サハリン・樺太の地域の歴史を扱ったものとして注目される。

日露関係史の視点からサハリン・樺太を研究したものとしては、秋月俊幸「サハリン島における日本人とアイヌ人：一九世紀中葉のロシア人の報告から」（1990）、同『日露関係とサハリン島：幕末明治初年の領土問題』（1994）が大きな成果である。後者は、秋月氏のそれまで発表した論考をまとめたものであるが、サハリン・樺太の歴史に関する 17〜19 世紀の通史としての性格も持ち合わせ

たものである。

地図史、地理研究では、高倉新一郎の北海道古地図研究の集大成として『北海道古地図集成』(1987)が刊行された。また、ドイツ東洋文化研究協会編『西洋人の描いた日本地図：ジパングからシーボルトまで』(1993）は、ヨーロッパにおける地図・地理研究をまとめたものである。個別論文では、秋月俊幸「日本北辺地図にみる東西の接触：欧州の航海者たちが利用した松前藩の『蝦夷地図』」(1996)、船越昭生「こだまする地図：ライデン大学図書館蔵シーボルト・コレクションの一図から」(1996)、秋月俊幸「日本北辺の地図史から見た初期の日露関係」(1997）などがある。秋月氏はその後、『日本北辺の探検と地図の歴史』(1999）を上梓し、日本・中国・ロシアによる地理調査や日露関係史の研究成果を関連させながら、北海道をはじめとする北方地図作製の通史を叙述した。

本州の各県においても、各地方におけるサハリン・樺太との関係について考察した研究が行われている。福井県の大野では、天野俊也「大野藩のカラフト開拓の一面（上)」(1987)、同「大野藩のカラフト開拓の一面（下)」(1987)、新潟県では中村義隆「幕末期越後豪農層の北蝦夷地（樺太）漁場開拓」(1988)、秋田県では金森正也『秋田藩の政治と社会』(1992)、福島県会津若松市では会津武家屋敷編『北のまもりと開拓：会津藩と北海道』(1993)、青森県では瀧本壽史「弘前藩蝦夷地警備関係史料『忍ぶ草』」(1994)、同「弘前藩宗谷陣屋をめぐって」(1994）などがある。また、この期に刊行された『福井県史』、『大野市史』、『新潟県史』、『出雲崎町史』などには、大野藩士や松川弁之助・鳥井権之助の北蝦夷地進出に関する記述にページが割かれ解説されている。一方、金沢在住で場所請負人山田文右衛門について研究していたロバート・G・フラーシェム，ヨシコ・N・フラーシェム氏は、『蝦夷地場所請負人：山田文右衛門家の活動とその歴史的背景』(1994）を刊行しているが、同書は大野藩士や松川弁之助・鳥井権之助の北蝦夷地進出についても論及する。

以上のように、1987 年～1990 年代は、研究者の問題関心がサハリン、アムール川下流域に向かいはじめ、個別実証的な論考が、それ以前に比べて激増した時期であった。この期の研究潮流の背景には、大局的に見ればソ連邦の崩壊や冷戦の終わりという世界の変革があったと言える。しかし、より直接的には、中国やロシアへの史料調査や現地調査が容易になったことや、中国やロシアからの視点で当該地域を見るような各種論考が生産されたこと、そして、それに触発される形で研究者の問題関心が連鎖的にこの地域へ向いていったことにあると言える。日本史、中国史、ロシア史といった国家史の枠組みが相対化され、むしろサンタン人のような国境を越えて活動するマージナルな人びとの交易活動が注目された時期であった。

しかし、サハリン・樺太を研究対象の枠に収めながらも、その地域だけでは成り立たないという性格も帯びていた。すなわち、サハリン・樺太史ではなく、サハリン・樺太を周辺の北海道、ロシア沿海地方などをも含む北東アジアという、より広範な地域で捉える地域史が存立していたにすぎない。このことは、既存の枠組みを打破して物事を考察するという、この期の全歴史学的な傾向に当てはまっている。すなわち、地方史・郷土史から地域史へという潮流である。山川出版社から「地域の世界史」という全 12 巻からなるシリーズが刊行されたのは 1997 年のことであった。

4．2000 年代

21 世紀になると、北東アジアの地域史という枠組みでの研究がより活発に行われるようになる。

その一つは、考古学と歴史学の研究者による、13～16 世紀ごろのアムール・サハリン地域の共同研究である。中村和之氏は、「元朝のサハリン進出をめぐる北方先住民の動向」(2003)、「十五世紀のサハリン・北海道の交易」(2005)、「大陸から見た中世日本の北方地域」(2005)、「亦失哈の遠征

と明朝の北東アジア支配」(2006)、「金・元・明朝の北東アジア政策と日本列島」(2006) などの論考を次々と発表したが、これらは前川要編『中世総合資料学の提唱：中世考古学の現状と課題』(2003)、東北中世考古学会編『海と城の中世』(2005)、矢田俊文，工藤清泰編『日本海域歴史大系第3巻（中世篇)』(2005)、小野正敏ほか編『中世の対外交流：場・ひと・技術』(2006)、天野哲也，臼杵勲，菊池俊彦編『北方世界の交流と変容：中世の北東アジアと日本列島』(2006) という中世考古学と歴史学の各論考からなる刊行物への寄稿である。前川要編『北東アジア交流史研究：古代と中世』(2007) は、前川要「白主土城の発掘調査」、アレクサンダー・ワシレフスキー「白主土城の国際研究に見る中世サハリン研究の諸問題と展望と戦略」、中村和之「白主土城をめぐる諸問題」、アレクサンダー・アルテミエフ「アムール下流の13～15世紀仏教寺院の調査総括」、中村和之「奴児干永寧寺の研究と課題」などアムール・サハリン地域を対象とした論考のみを収めたもので、ロシアと日本の研究者による国際的な共同研究（科学研究費）の成果である。その翌年には、楊暘「奴児干都司と明朝の北方政策：永寧寺碑文と北東アジア」、中村和之「モンゴル時代の東征元帥府と明代の奴児干都司」、榎森進「明朝のアムール政策とアイヌ民族」、アレクサーンドル＝R.アルテーミエフ「永寧寺の発掘をめぐって：アムール川下流域における十三～十五世紀の仏教寺院」、三宅俊彦，アレクサーンドル＝L.イーヴリエフ「北東アジアの銭貨流通」、瀬川拓郎「大陸・サハリン・日本列島の交流：サハリン＝アイヌの成立」、山口欧志，井出靖夫「サハリン白主土城」などを収めた菊池俊彦，中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ：奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界』(2008) が刊行された。これは2005年11月に開催された中国、ロシア、日本の研究者による国際シンポジウムの成果であった。また同年、A.R.アルテーミエフ著，菊池俊彦・中村和之監修，垣内あと訳『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文：15世紀の北東アジアとアイヌ民族』(2008) が刊行されたが、これは2005年12月に急逝したアルテーミエフ氏の業績の日本への普及に貢献した。また、中村和之「アイヌの北方交易とアイヌ文化：銅雀台瓦硯の再発見をめぐって」(2008) は、加藤雄三，大西秀之，佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史：周縁地域における社会制度の形成』に収録された論考で、これは日本学術振興会、及び人間文化研究機構主催の連携研究プロジェクトの成果の一部であった。2000年代は、「小泉構造改革」の煽りを受け、大学・研究機関が外部研究資金獲得に奔走し、各種共同研究プロジェクトがさかんになった時期であるが、その結果・成果として、学際的研究がめざましく発展したのである。

北方諸民族やアイヌの歴史・文化についても共同研究がさかんになり、大塚和義編『ラッコとガラス玉：北太平洋の先住民交易』(2001) や同編『北太平洋の先住民交易と工芸』(2003)、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『樺太アイヌ民族誌：工芸に見る技と匠』(2004) などが刊行された。また、科学研究費の研究成果として、榎森進『13～19世紀における列島北方地域史とアムール川流域文化の相互関連に関する研究』(2006)、中村和之『蝦夷錦の制作年代と流通に関する研究』(2008) もまとめられた。個別論文では、佐々木史郎「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」(2001)、同「山丹交易と海上・河川交通」(2001)、出利葉浩司「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」(2002)、中村和之「14世紀アムールランドのそりと履板」(2002)、同「アイヌの沈黙交易について」(2002)、佐々木史郎「山丹交易と蝦夷地・日本海域」(2005)、同「北東アジアの河川、海上交通とその拠点：「満洲仮府」デレンの繁栄」(2005)、同「サンタンとスメレンクル」(2006)、高倉浩樹「18～19世紀の北太平洋世界における樺太先住民交易とアイヌ」(2006) が発表され、サハリン・樺太の住民であるアイヌ、ウイルタ、ニヴフやアムール川下流域のウリチの17～19世紀における交易活動に注目が集まった。なかでも出利葉氏の論考は、アイヌの小型毛

皮獣狩猟の開始とサンタン交易の幕府直営化との関係や、場所請負制下における「軽物」の納付の問題を考察し、アイヌの狩猟活動に対する評価の再考を促した点で画期的であった。また、榎森進，小口雅史，澤登寛聡編『エミシ・エゾ・アイヌ（アイヌ文化の成立と変容：交易と交流を中心として上）』(2008)、同編『北東アジアのなかのアイヌ世界（アイヌ文化の成立と変容：交易と交流を中心として下）』(2008）は、法政大学国際日本学研究所主催のシンポジウムの成果を土台として刊行されたものである。

日本近世史の分野においては、1806-07（文化3～4）年に起こったフヴォストフ事件に関する情報が幕閣の政策決定に与えた影響について考察した藤田覚「近世後期の情報と政治：文化年間日露紛争を素材として」(2000）や、能登の時国家による北蝦夷地への廻船派遣について論及する田島佳也「「海民的」企業家・時国左門の秘められた北方交易：幕末、時国家の廻船交易の検討」(2009）などがある。後に藤田氏は『近世後期政治史と対外関係』(2005)、田島氏は『近世北海道漁業と海産物流通』(2014）を刊行し、それまでの論考をまとめている。また、2002年から吉川弘文館が「日本の時代史」全30巻を順次刊行しはじめた。この第19巻は、菊池勇夫編『日本の時代史19　蝦夷島と北方世界』(2003）であり、北海道とその周辺の歴史が、日本史の通史を扱うシリーズにおいて独立した1冊として刊行されたことは、日本列島北方への関心の高まりとそれまでの研究蓄積を顕著にあらわしていると言える。なお、同書には榎森進「北東アジアから見たアイヌ」や川上淳「日露関係のなかのアイヌ」が収録されており、サハリン・樺太や千島列島の歴史が日本史の問題として普通に取り上げられるようになったことも付言しておく。

歴史人口学の分野では、人別帳の分析によりサハリンアイヌの人口を明らかにした速水融「徳川幕府のカラフト先住民人口調査」(2000)、「幕末カラフトの人口構造」(2009）がある。

絵画や絵巻物を紹介した研究としては、18世紀末にサハリン・樺太南部を調査した幕吏小林源之助（豊章）の描いた風景画を紹介した林昇太郎「史料紹介　小林豊章筆『唐太島東西浜図』について⑴」(2003)、同「史料紹介　小林豊章筆『唐太島東西浜図について⑵』」(2005）や、三浦泰之，東俊佑「『松本吉兵衛紀行絵巻』について：安政6年（1859）秋田藩士の蝦夷地紀行」(2004）がある。また、佐々木利和氏は『樺太風俗図』や『北蝦夷地部』について考察した論考を収録した『アイヌ絵誌の研究』(2004）を上梓した。

地図史、地理研究では、高木崇世芝『北海道の古地図：江戸時代の北海道のすがたを探る』(2000）や川村博忠『近世日本の世界像』(2003）が刊行された。個別論文では、松浦茂「1709年イエズス会士レジスの沿海地方調査」(2001）が公表され、清の康熙帝が『皇輿全覧図』を作製するためにアムール川下流域へ派遣したイエズス会士レジスらの調査が、ヨーロッパにおけるエゾ研究の転換点になったことを論じている。その後、松浦氏は科学研究費により『清朝の『皇輿全覧図』作製とその世界史的な意義に関する研究』(2007）をまとめている。一方、三浦泰之，山本命，東俊佑「近世後期から近代初期に形成された知識人ネットワークに関する基礎研究：2007（平成19）年度調査報告」(2008）のなかで山本氏は、幕末に蝦夷地を調査した松浦武四郎自筆の「樺太地図」について紹介している。

本州の各地の視点からの研究としては、青森県立郷土館開館30周年を記念して、青森県内所在の「蝦夷錦」を多数展示した特別展が開催され、青森県立郷土館編『蝦夷錦と北方交易（開館30周年記念特別展）』(2003）が刊行された。その展示構成の中心を務めた瀧本壽史氏は、「蝦夷錦の来た道：青森県内所在の蝦夷錦を通して」(2006)、「海峡を越える地域間交流」(2006)、「蝦夷錦をめぐる社会史：青森県内所在の蝦夷錦を通して」(2007）などを発表している。秋田県では、後藤富貴「秋田

県公文書館所蔵の蝦夷地警備関係史料」(2006)、同「秋田県公文書館所蔵「蝦夷地目録」について」(2007) が公表され、秋田藩のカラフト警備に関する史料の所在が明らかになった。新潟県では、松川弁之助の研究に取り組んでこられた石黒正英氏による『にいがたボロボロ草』(2005) が刊行された。福島県では、『会津若松市史』が刊行され、2002年刊行の第6巻には、文化年間における会津藩のカラフト警備についての記述がある。

満洲語檔案を用いた研究としては、松浦茂氏により、「ウリンの輸送問題と辺民制度の改革」(2000)、「18世紀のサハリン交易とキジ事件」(2003)、「1727年の北京会議と清朝のサハリン中・南部進出」(2003) が次々に発表された。また松浦氏は、科学研究費による共同研究の成果として松浦茂編『13世紀以降のアムール川下流・サハリン地方に関する研究』(2004) をまとめ、「繊維製品の流入と辺民社会」、「満洲語檔案に現れる北方少数民族の言語」を寄稿している。そして、これまでの集大成として『清朝のアムール政策と少数民族』(2006) を刊行されたことは、アムール川下流域、サハリン・樺太の歴史研究の存在を内外に示す画期的な成果であった。そのほか松浦氏は、「文化5・6年松田・間宮の北辺調査」(2009) を発表しているが、これまで満洲語檔案を分析してきた松浦氏が日本側の史料と付き合わせて事実関係を検証している点できわめて興味深い論考である。

対外関係史や日露関係史では、ロシア語の文献・史料を用いて考察する研究が多く、キリチェンコ A.A.，伊賀上菜穂訳「海賊船ユノナ号とアヴォシ号：ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」(2002)、有泉和子「フヴォストフ・ダヴィドフ事件と日本の見方：ロシアの貿易利害との関連で」(2004)、同「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」(2004)、クリモワ・オリガ「ロシア史料に見るフヴォストフ海軍中尉とダヴィドフ海軍少尉が行った1807年度第2回サハリン遠征とロシア政府の対応」(2007) などフヴォストフ事件に関するものや、麓慎一「日魯通好条約について：日露交渉とE・B・プチャーチンへの訓示を中心に」(2007)、同「日本開国期における帝政ロシアのサハリン島政策」(2009) など、幕末期の日露関係を論じたものがある。そのほか、松本英治「オランダ商館長ドゥーフとフヴォストフ文書」(2001)、及川将基「日露領土交渉のなかの「是迄仕来」：条約文の解釈と領土観」(2004)、伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』(2009) などがある。

以上のように、2000年代は北東アジアの地域史研究の全盛期であったと位置づけられるが、日本史の研究においては、幕末期の「箱館奉行所文書」などくずし字の一次史料を読み解きながら、サハリン・樺太の歴史を考察しようとする研究姿勢もあらわれはじめた。田端宏「蝦夷地、北蝦夷地について：蝦夷地観をめぐって」(2000) は、1859 (安政6) 年箱館奉行所所属の足軽倉内忠右衛門のニコラエフスク訪問が、日本人の海外渡航禁止に抵触することをめぐる議論から、日本人の蝦夷地観の諸相にせまる。東俊佑「嘉永年間におけるカラフトをめぐる動向」(2005)、同「幕末カラフトにおける蝦夷通詞と幕府の蝦夷地政策」(2005)、同「北蝦夷地在住・栗山太平の活動」(2006)、同「幕末期北蝦夷地における大野藩のウショロ場所経営」(2007)、同「北蝦夷地全島一周をめざして：付、栗山太平の北蝦夷地調査記録」(2008)、同「北蝦夷地における直捌の展開と越後差配人の漁場開設」(2009) は、蝦夷通詞・清水平三郎、栗山太平、越前大野藩士、越後出身の松川弁之助・鳥井権之助など、幕末期にサハリン・樺太で活動した人びとについてそれぞれ論じたり、関係史料を紹介したものである。檜皮瑞樹「幕末期樺太におけるアイヌ支配の揺らぎと再編成：トコンベ出奔事件をめぐって」(2006)、同「19世紀樺太をめぐる「国境」の発見：久春内幕吏捕囚事件と小出秀実の検討から」(2009) は、文久～慶応期にサハリン・樺太で起こった各種事件を素材に、幕府の蝦夷地・アイヌ支配の論理を考察したものである。そのほかにも、東俊佑「近世後期カラフト探検

と北東アジア情報：間宮林蔵の探検とその関係史料の再評価に向けて」(2002)、同「サハリン島をさす呼称:「カラフト」の語源に関する覚書」(2003)、中村和之「最上徳内『唐太島』について」(2003)、関根達人，市毛幹幸「カラフトアイヌ供養・顕彰碑と嘉永六年クシュンコタン占拠事件」(2008)、添田仁「幕末ハウトンマカ一件と大野藩」(2008)、本間はるか「幕末における北東アジア諸民族の交流について：主に「サンタン人」とカラフトアイヌを中心に」(2008) などサハリン・樺太そのものを研究対象とした論考が発表されている。

2000年代の研究動向を総括すれば、北東アジアをテーマとした科学研究費などによる共同研究が行われ、それに関連した成果発表としてシンポジウムや研究会がさかんに開催された時期であったと言える。一方で、サハリン・樺太の歴史自体を考察しようとする研究姿勢も見られるようになる。それは、サハリン・樺太史研究が一つのジャンルとして確立する芽生えであったと言えるのかもしれない。

5．2010年代

ここ10年の前近代史に関する研究動向は、前代ほど活発ではないものの、さまざまな視角からのサハリン・樺太の歴史に関する論考の蓄積が見られる。数量的に若干停滞した感もあるが、それは北東アジア地域史研究ブームが去って行ったのと、団塊世代以上の引退、団塊ジュニア世代前後の就職難、近年の少子化による現役研究者の絶対数減少、そして、それにより一人あたりの研究者に課せられる諸業務や社会貢献活動の比率の増大などが影響しているものと想像される。

サハリン・樺太の動向を江戸期の一次史料（くずし字史料）をも用いながら考察したものとしては、幕末期の幕府の政策としてアイヌへの種痘が行われたことを考察した永野正宏「1857～1859年における箱館奉行による種痘の再検討」(2011)、同「19世紀前期の蝦夷地における痘瘡対策：種痘実施以前の在地社会を中心に」(2015)、同「近世蝦夷地における種痘対策」(2017) があり、サハリンアイヌのことにも論及する。一方、東俊佑「幕末のサンタン交易について」(2010) は、サンタン人と幕府との交易場所のシラヌシからトンナイへの変更や、ウショロ場所におけるサンタン人とアイヌの私的な取引が幕府によるサンタン交易直営化後も継続していた事実を指摘する。また、「『トコンヘ一件』再考：北蝦夷地ウショロ場所におけるアイヌ支配と日露関係」(2017) は、日本側の支配を嫌うアイヌの青年ハウトンマカ（トコンベ）のロシアへの逃亡事件が、ロシア側の勧誘に応じた彼の父ヲフツセリとその一家・親戚の主体的意思に基づく日本側への造反行為であったことを指摘する。「『土人給料勘定』のしくみ（Ⅰ）：北蝦夷地ウショロ場所経営帳簿『北蝦夷地用』の分析」(2018) は、ウショロ場所アイヌの給料や手当の額が詳細に記された帳簿を分析し、「給料勘定」とよばれるアイヌ雇用システムの実態解明を試みる意欲的な取り組みである。そのほか、中・近世考古学と文献史料の両方からサハリン・樺太への日本人の進出を分析した関根達人「江戸時代に樺太で亡くなった人々：「白主村墓所并死亡人取調書上」の検討」(2012) や、幕末期の絵地図からサハリン・樺太の諸民族、日本人、ロシア人の居住空間を分析した同「場所図・古地図にみる1850年代の樺太（サハリン）島における先住民族と国家：目賀田帯刀筆「北海道歴検図」の検討を中心として」(2012) がある。

北東アジアの歴史文化研究では、考古学･歴史学の論考を中心に約30編を収録した菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』(2010) が刊行された。同書には、中村和之「「北からの蒙古襲来」をめぐる諸問題」、越田賢一郎「ガラス玉の道」、佐々木史郎「サンタン交易の経済学」、松浦茂「『秘帳坎々奇話』と『北征秘談』」などが収録されている。物質文化の研究としては、三宅俊彦「サハリン出土

の銭貨」(2013)、I.A.サマーリン，垣内あと訳，菊池俊彦校閲，三宅俊彦・中村和之解説「サハリン州オハ地区出土の中国古銭コレクション」(2014)、中村和之，森岡健治，竹内孝「北海道におけるガラス玉の流入とその背景：北海道平取町から出土した資料を中心に」(2013) などがある。アイヌの物質文化について考証したものとしては、中村和之「謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイナウカサについて」(2012) などがある。

北方諸民族やアイヌに関する研究では、佐々木史郎，加藤雄三編『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』(2011) のなかに、中村和之「骨嵬・苦兀・庫野：中国の文献に登場するアイヌの姿」、佐々木史郎「ヘジェ・フィヤカ・エゾ：近世における日本と中国の北方民族に対する認識」が収録されている。また佐々木氏は、「近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン，ギンギツネの流通と狩猟方法」(2013)、「一九世紀の国境策定と先住民：アムール、樺太、千島における日ロ中のせめぎあいの中で」(2013)、「北東アジア先住民族の歴史・文化表象：中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」(2015) を発表している。関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易：アイヌ文化と内国化』(2014) は、関根氏のこれまでの論考をまとめたもので、「カラフト（サハリン島）への和人の進出」に関する論考5本も収録されている。東俊佑「近世蝦夷地交易品ノート⑴：17～18世紀アイヌ生産品を中心に」(2013)、及び同「近世蝦夷地交易品ノート⑵：和人からアイヌへの交易品について」(2015) は、北海道開拓記念館から北海道博物館への展示リニューアルに際し、「蝦夷地の産物コレクション」コーナーを作製するためにまとめたもので、アイヌ・和人双方の交易品に関する記事（史料）を抽出して並べた便利な手引きとなっている。

アムール川下流域、サハリンの人びとの交易活動の実態を探るため、普段文献史学により研究を行っている研究者による現地調査（現在の住民への聞き取り調査）も行われている。科学研究費による研究成果報告として、榎森進『15～19世紀、列島北方地域とアムール川最下流域の諸民族との交流に関する研究』(2010)、東俊佑，白石英才「ニヴフの交易活動に係る聴き取りと物質文化資料の調査について：2010年度調査報告」(2013)、東俊佑「アムール川下流域住民の交易活動に係る物質文化資料について：2014年度ボゴロツコエ、ブラワー調査報告」(2015) がある。現地住民が語る情報を研究に応用するためには、高度な情報リテラシー能力が要求されるが、調査当時の生の声を記録しておくことは、後世の研究資料として有効である。

地図史、地理研究の分野では、北方地図の書誌情報を詳細に記した高木崇世芝『近世日本の北方図研究』(2011) が刊行された。そのほか個別論文では、松浦茂「高橋景保『北夷考証』の成立と北方地理学の進展」(2012)、前田幸子「シーボルトから没収した『カラフト島図』：伊能図の筆跡との比較」(2017) などがある。

絵画史研究では、故林昇太郎氏の論考をまとめた『アイヌ絵とその周辺：林昇太郎美術史論集』(2010) が刊行された。そのほか、東京大学史料編纂所所蔵で「於シラヌシ会所山丹貿易之図」などを収載する巻子本（模本）を紹介した東俊佑「村垣家所蔵の蝦夷地巡視関係巻子本について」(2014) などがある。

対外関係史・日露関係史を含む日本史分野においては、吉川弘文館から「日本の対外関係」シリーズ全7巻が刊行され、中村和之「山丹交易の源流」(2010)、麓慎一「確定される『国境』と地域」(2012) などサハリン・樺太の歴史にもふれる論考を含んでいる。また、2013年度の歴史学研究会は「変容する地域秩序と境域：蝦夷地と中央ユーラシアの経験から」をテーマに全体会が開催され、谷本晃久「19世紀蝦夷地における「境域」としての可能性」(2013) では、「異国境」としてのカラフトと千島の性格を蝦夷地における「境域」と捉える見方が提示された。岩波書店は、2013年から

2015年にかけて「岩波講座日本歴史」全22巻を刊行し、第13巻の近世4には谷本晃久「近世の蝦夷」(2015)、第20巻・地域論テーマ巻1には中村和之「中世・近世アイヌ論」(2014) を収録している。そのほか個別の論考としては、榎森進「「日露和親条約」がカラフト島を両国の雑居地としたとする説は正しいか？」(2013)、同「「日露和親条約」調印後の幕府の北方地域政策について」(2014)、麓慎一「近世後期における北方の境界問題」(2015)、同「19世紀後半における日露関係とサハリン島の諸民族」(2017) などがある。麓氏は、一方で『開国と条約締結』(2014) を刊行し、幕末期の外交史のなかにサハリン・樺太をめぐる日露の領土問題を位置づけた。論文集としては、菊池勇夫『アイヌと松前の政治文化論：境界と民族』(2013)、檜皮瑞樹『仁政イデオロギーとアイヌ統治』(2014)、田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』、松本英治『近世後期の対外政策と軍事・情報』(2016) などが相次いで刊行された。

近年の新しい研究動向としては、東京大学史料編纂所の保谷徹氏を中心とする大型研究プロジェクトが立ち上がり、ロシア・サンクトペテルブルクの史料保存機関に所在する日本関係史料の存在が明らかにされてきたことがある。なかでも衝撃的な「発見」は、19世紀初頭のサハリンアイヌに関する交易帳簿であった。2009年6月に開催された「日露関係史料をめぐる国際研究集会」において、「大福帳」「簾貸帳」と題する1805（文化2）年の2点の帳簿が紹介された。その内容は、保谷徹「サハリン・アイヌ交易帳簿の「発見」と共同プロジェクト」(2010)、ワジム・クリモフ「サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所（旧東洋学研究所）所蔵の交易帳簿について」(2010)、谷本晃久「帳簿の概要とアイヌ交易研究」(2010) で報告されている。また、その翌年には、ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館（クンストカーメラ）のシニーツィン氏が同研究集会において、同館所蔵の日本関係資料の所在状況について報告した。その成果は、シニーツィン・アレクサンドル「ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館（クンストカーメラ）が蒐集したフヴォストフ・ダヴィドフ遠征関係資料について」(2011) で報告されている。これらサンクトペテルブルク所在の資料は、フヴォストフ事件の際にロシア側に接収された日本のものであると考えられている。とくにアイヌの交易帳簿は、類似の資料が日本では稀少であり、にわかに帳簿研究が脚光を浴びることとなった。谷本晃久「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報：一九世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた」(2014) は、帳簿の内容を詳しく検討した成果である。

まとめにかえて

以上、戦前から現在までの研究動向をいくつかの画期に区切って述べてきた。前近代のサハリン・樺太には、アイヌ、ウイルタ、ニヴフ（江戸期の日本側史料の用語では「蝦夷」、「ヲロツコ」、「スメレンクル」、「ニクブン」など）が住み、アムール川下流域から渡来するサンタン人や日本の松前藩、江戸幕府の関係者などと交易を行っていた。現在、少数民族となった人びとは、前近代においてはこの地域の多数者（マジョリティ）であり、同地域の歴史の主人公である。前近代におけるサハリン・樺太史研究の進展は、彼らの歴史や文化に目を向けた研究の隆盛と連動している。研究史を振り返ると、そのことは一目瞭然である。

また、研究の視座を大きく変化させる要因は、社会の動きや背景の影響はもちろんであるが、一次史料の利用環境の改善といった側面にも目を向ける必要がある。1970～80年代に一地方史であった北海道史が、「北からの日本史」として、日本史研究の主要なジャンルに成り上がったのは、『新北海道史』や『松前町史』の史料編刊行など自治体史編纂事業や、史料集刊行等による史料利用

環境の改善が大きい。1980～90年代の北東アジア地域史の芽生えも、中国、ロシアでの史料調査やその利用が一因となっている。その意味では、全体的に研究者の数が減少し、研究の衰退・停滞を招いている感のある昨今においては、個別研究を進めると同時に、史料の紹介や、史料集の刊行、史料整理に、日常的に力を入れていかなければならないと言える。

【文献リスト】

〈凡例〉

・戦前から2018年までの関係文献リストである。1970年以前は「戦前」と「戦後～1970（昭和45）年」に一括し、1971年以降は年ごとに一括した。
・並び順は発行年を基本とし、同年のものは著者名の50音順に並べた。
・発行年は、論考、著書などの初出年を示し、のちに再録されたものは「＊」で示した。
・発行年の月日や掲載ページは、筆者が知りうる範囲のものを記したので、所々不備がある点をお断りしておく。
・雑誌・書籍名中の（　）は、便宜のため筆者が補った情報であり、雑誌・書籍の原題ではない。

戦前

河野常吉「嗚呼樺太島」『北海道毎日新聞』明治33年11月3日付、1900年11月3日　＊河野常吉『河野常吉著作集Ⅱ：北海道史編（一）』北海道出版企画センター、1975年6月10日、pp.39-125所収
小川運平『満洲及樺太』博文館、1909年12月27日
高島正『福井県人樺太経営史』私立図書館高島文庫、1912年9月10日
風間正太郎『贈従松川辨之助君事蹟考』松川藤陰、1916年
北海道庁編『北海道史　第一：自第一編至第六編』北海道庁、1918年12月27日
小川運平『日本ト大陸』北駸学会（大阪屋号書店）、1923年7月18日
樺太庁編『樺太沿革史』樺太庁、1925年8月5日
末松保和『近世に於ける北方問題の進展』至文堂、1928年11月
牧野信之助「幕末諸藩の富強策について：特に越前大野藩の場合」『武家時代社会の研究』刀江書房、1928年11月10日、pp.145-169
蘆田伊人「樺太島の地図学史上に於ける或考察」『史苑（立教大学）』第4巻第6号、1930年9月、pp.347-366
相田泰三「文化年間に於ける会津藩の樺太守備に就いて」1931年10月7日
白山友正「山丹交易事情」『経済史研究』40、1932年
中野耕正編『史蹟鵜城　附鵜城の現況』樺太鵜城青年団、1934年5月15日
平岡雅英『維新前後の日本とロシア』ナウカ社、1934年　＊のち平岡雅英『日露交渉史話』筑摩書房、1944年として再刊
樺太庁史蹟名勝天然記念物調査会編『史蹟調査報告書』樺太庁、1936年3月31日
北海道庁編『新撰北海道史　第一巻：概説』北海道庁、1936年12月12日
北海道庁編『新撰北海道史　第二巻：通説一』北海道庁、1937年10月10日
高倉新一郎「近世に於ける樺太を中心とした日満交易」『北方文化研究報告（北海道帝国大学）』第１輯、1939年3月、pp.163-194

高倉新一郎，柴田定吉「我国に於ける樺太地図作製史：北日本地図作製史　第1報」『北方文化研究報告（北海道帝国大学）』第2輯、1939年10月15日、pp.273-320
西鶴定嘉『新撰大泊史』大泊町、1939年7月　＊のち西鶴定嘉『樺太大泊史』国書刊行会、1981年3月15日として再刊
西鶴定嘉『樺太探検の人々（樺太叢書1）』樺太庁、1939年5月30日
太田三郎『日露樺太外交戦』興文社、1941年8月15日
高倉新一郎，柴田定吉「我国に於ける千島地図作製史：北日本地図作製史　第2報」『北方文化研究報告（北海道帝国大学）』第3輯、1940年5月、pp.267-341
伝記学会編『北進日本の先駆者たち』六甲書房、1941年8月25日
西鶴定嘉『樺太史の栞（樺太叢書6）』樺太庁、1941年8月30日
洞富雄「樺太探検とシーボルト事件」『科学知識』昭和16年6・7月号、1941年　＊のち洞富雄『樺太史研究：唐太と山丹』新樹社、1956年所収
高倉新一郎『アイヌ政策史』日本評論社、1942年
高倉新一郎，柴田定吉「我国に於ける北海道本島地図の変遷⑴：北日本地図作製史　第3報」『北方文化研究報告（北海道帝国大学）』第6輯、1942年10月、pp.1-80
南満洲鉄道株式会社・弘報課編『東韃紀行』満洲日日新聞社東京支社出版部、1942年2月22日
洞富雄「山靼貿易とその政治的背景」早稲田大学史学会編『浮田和民博士記念史学論集』六甲書房、1943年9月、pp.79-166　＊のち洞富雄『樺太史研究：唐太と山丹』新樹社、1956年所収
鳥居龍蔵『黒龍江と北樺太』生活文化研究会、1943年6月18日
皆川新作『最上徳内（郷土偉人伝選書3）』電通出版部、1943年10月5日
平岡雅英『日露交渉史話』筑摩書房、1944年　＊のち平岡雅英著，高野明解説『日露交渉史話：維新前後の日本とロシア』原書房、1982年9月30日として再刊

戦後～1970（昭和45）年
高倉新一郎，柴田定吉「我国における北海道本島地図の変遷⑵：北日本地図作製史　第4報」『北方文化研究報告（北海道大学北方文化研究室）』第7輯、1952年3月、pp.47-166
斎藤秀助編『早川弥五左衛門武英』早川弥五左衛門武英伝刊行会、1953年3月30日
高倉新一郎「蝦夷風俗画について」『北方文化研究報告（北海道大学北方文化研究室）』第8輯、1953年3月、pp.1-67
高野明「大槻玄沢遺物フヴォストフ文書考」『日本歴史』第65号、1953年10月、pp.54-61
高倉新一郎「千島樺太の開発と土人」『北方文化研究報告（北海道大学北方文化研究室）』第10輯、1955年3月、pp.55-81
高倉新一郎「北海道地図の変遷補遺」『北方文化研究報告（北海道大学北方文化研究室）』第11輯、1956年3月、pp.49-73
洞富雄『樺太史研究：唐太と山丹』新樹社、1956年　＊「カラフト探検とシーボルト事件」「山靼交易とその政治的背景」所収　＊のち洞富雄『北方領土の歴史と将来』新樹社、1973年として増補改訂
洞富雄「久春古丹のムラヴィヨフ哨所」『日本歴史』第92号、1956年2月、pp.46-53
洞富雄『間宮林蔵（人物叢書）』吉川弘文館、1960年　＊のち洞富雄『間宮林蔵（人物叢書新装版）』吉川弘文館、1986年12月として増補

赤羽壮造「間宮林蔵の隠密について」『日本歴史』第145号、1960年7月、pp.82-83
村井益男「幕末北蝦夷地場所開拓の一史料：鳥井家文書の紹介」『日本大学史学会研究彙報』4、1960年12月、pp.89-94
高野明「フヴォストフ文書考」『早稲田大学図書館紀要』第6号、1964年12月、pp.1-28
高倉新一郎著，高倉理事長退任記念出版委員会編『アイヌ研究』北海道大学生活協同組合、1966年　＊「近世における樺太を中心とした日満交易」「千島・樺太の開発と土人」所収
土井利忠公百年祭奉賛会編『土井利忠公と大野藩』1966年
池上二良「サンタンことば集」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』第2号、1967年、pp.27-87
吉田武三『松浦武四郎（人物叢書）』吉川弘文館、1967年
吉田武三『北方の空白：北方圏における日本・ロシア交渉史』北方文化研究会、1967年8月10日
池上二良「カラフトのナヨロ文書の満州文」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』第3号、1968年、pp.179-189

1970（昭和45）年
北海道編『新北海道史　第二巻通説一』北海道、1970年3月30日

1971（昭和46）年
池上二良「19世紀なかごろのオロッコ語集：サンタン語・ギリヤーク語をふくむ」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』第5号、1971年、pp.79-184
高野明『日本とロシア：両国交渉の源流（紀伊国屋新書）』紀伊國屋書店、1971年5月31日
北海道編『樺太基本年表』1971年
北方領土問題調査会編『北方領土：古地図と歴史』北方領土問題調査会、1971年

1972（昭和47）年
榎森進「北海道近世史研究の諸問題（上）：研究史と当面の課題を中心に」『松前藩と松前』創刊号、1972年11月30日、pp.21-55　＊のち榎森進『北海道近世史の研究：幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター、1982年11月25日、pp.373-489所収
大熊良一『幕末北方関係史攷』北方領土問題対策協議会、1972年
高倉新一郎『新版アイヌ政策史』三一書房、1972年
海保嶺夫「文献史料よりみたる樺太アイヌのミイラ作製について」『史観（早稲田大学史学会）』第85号、1972年3月、pp.43-55　＊のち海保嶺夫『日本北方史の論理』雄山閣、1979年11月25日に「近世樺太史とアイヌ人の葬制」として所収
吉田森「北蝦夷地に於ける大野藩人の開拓と国防」『奥越史料（大野市文化財保護委員会）』第3号、1972年、pp.1-72

1973（昭和48）年
榎森進「北海道近世史研究の諸問題（下）：研究史と当面の課題を中心に」『松前藩と松前』第2号、1973年3月20日、pp.9-44　＊のち榎森進『北海道近世史の研究：幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター、1982年11月25日、pp.373-489所収

海保嶺夫「近世樺太における鉄器と土器」『北海道地方史研究』90号、1973年、pp.29-36　＊のち海保嶺夫『日本北方史の論理』雄山閣、1979年11月25日に「近世樺太における鉄器の流通形態：在地的土器文化の消滅によせて」として所収
高倉新一郎編『アイヌ絵集成』番町書房、1973年
洞富雄『北方領土の歴史と将来』新樹社、1973年　＊「カラフト探検とシーボルト事件」「山靼交易とその政治的背景」所収
ジョン・J.ステファン著，安川一夫訳『サハリン：日・中・ソ抗争の歴史』原書房、1973年

1974（昭和49）年
赤羽栄一『間宮林蔵：北方地理学の建設者（人と歴史シリーズ　日本24）』清水書院、1974年3月　＊のち赤羽栄一『未踏世界の探検・間宮林蔵（清水新書36）』清水書院、1984年10月として再刊
秋月俊幸「嘉永年間ロシヤの久春古丹占拠」『スラヴ研究』19号、1974年8月、pp.59-95
梅木通徳『蝦夷古地図物語』北海道新聞社、1974年12月10日
綱淵謙錠「特別企画　唐太絵巻」『太陽』8月号・No.135、1974年7月12日、pp.97-108
吉田金一『近代露清関係史（世界史研究双書16）』近藤出版社、1974年
吉田武三『北方史入門』伝統と現代社、1974年7月25日

1975（昭和50）年
佐々木利和「東京国立博物館保管　シーボルト旧蔵「樺太風俗図」について」『Museum（東京国立博物館）』289号、1975年4月、pp.21-34　＊のち佐々木利和『アイヌ絵誌の研究』草風館、2004年2月20日所収

1976（昭和51）年
加藤九祚「間宮林蔵の見たギリヤク族(1)」『国立民族学博物館研究報告』第1巻第2号、1976年7月20日、pp.305-333
船越昭生『北方図の歴史』講談社、1976年
渡瀬修吉『北辺国境交渉史』回天発行所、1976年10月1日

1977（昭和52）年
秋月俊幸「幕末の樺太における日露雑居の成立過程(1)」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』11号、1977年12月26日、pp.63-81
上原久『高橋景保の研究』講談社、1977年3月
郡山良光「フヴォストフ文書の訳文」『日本歴史』第346号、1977年3月、pp.82-86
島谷良吉『最上徳内』吉川弘文館、1977年8月1日

1978（昭和53）年
中村新太郎『日本人とロシア人：物語日露人物往来史』大月書店、1978年5月29日
北海道開拓記念館編『新天地を求めて（常設展示解説書3）』北海道開拓記念館、1978年3月　＊海保嶺夫ほか執筆

真鍋重忠『日露関係史 1697-1875』吉川弘文館、1978 年 4 月 1 日

1979（昭和 54）年

秋月俊幸「幕末の樺太における日露雑居の成立過程（承前）」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』12 号、1979 年 3 月 30 日、pp.171-206

荒井庸夫『間宮林蔵』筑波書林、1979 年 12 月 15 日

榎森進「ユーカラの歴史的背景に関する一考察：主に邦訳ユーカラを素材に」『史潮』第 5 号、1979 年 8 月、pp.67-103　＊のち榎森進『北海道近世史の研究：幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター、1982 年 11 月 25 日所収

海保嶺夫『日本北方史の論理』雄山閣、1979 年 11 月 25 日

船越昭生「シーボルト資料カラフト図に関する若干の検討：“NIPPON”所収図およびシーボルトコレクション図と内閣文庫蔵図との関連において」『奈良女子大学地理学研究報告』第 1 号、1979 年、pp.81-100

1980（昭和 55）年

郡山良光『幕末日露関係史研究』国書刊行会、1980 年 8 月

谷澤尚一「安政三年採録のニクブン語彙を繞って：松浦武四郎の「野帳」を中心に」『北方文化研究（北海道大学文学部附属北方文化研究施設）』第 13 号、1980 年 8 月 9 日、pp.135-161

ロバート・G・フラーシェム，ヨシコ・N・フラーシェム「鳥井権之助と加賀藩への意見書」若林喜三郎編『加賀藩社会経済史の研究』名著出版、1980 年 4 月 30 日、pp.390-396

1981（昭和 56）年

小林真人「近世の北海道史研究動向」地方史研究協議会編『蝦夷地・北海道：歴史と生活』雄山閣出版、1981 年 11 月、pp.393-399

北海道編『新北海道史　第一巻概説』北海道、1981 年 3 月 20 日

1982（昭和 57）年

榎森進『北海道近世史の研究：幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター、1982 年 11 月 25 日　＊「ユーカラの歴史的背景に関する一考察：主に邦訳ユーカラを素材に」「北海道近世史研究の諸問題：研究史と当面の諸課題を中心に」pp.373-489 所収

大谷恒彦『間宮林蔵の再発見』筑波書林、1982 年 3 月 15 日

平岡雅英著，高野明解説『日露交渉史話：維新前後の日本とロシア』原書房、1982 年 9 月 30 日　＊1944 年筑摩書房版の復刻

1984（昭和 59）年

赤羽栄一『未踏世界の探検・間宮林蔵（清水新書 36）』清水書院、1984 年 10 月　＊ 1974 年刊の再刊　＊のち赤羽栄一『未踏世界の探検者間宮林蔵（新・人と歴史拡大版 28）』清水書院、2018 年 7 月として復刻再刊

榎森進「ユーカラの歴史的背景に関する一考察：主に邦訳ユーカラを素材に」高倉新一郎監修，石附喜三男編『北海道の研究　第 2 巻　考古篇Ⅱ』清文堂出版、1984 年 8 月 25 日、pp.419-474

坂井正喜「『唐太絵巻』・『唐太嶼奇覧』考」『会津文化財』1984、会津文化財調査研究会、1984 年、pp.49-107

中村義隆「松田伝十郎著「北夷談」にみる幕府のカラフト経営」小村弌先生退官記念事業会編『越後・佐渡の史的構造』小村弌先生退官記念事業会、1984 年 3 月 25 日、pp.485-514

1985（昭和 60）年

1986（昭和 61）年

加藤九祚『北東アジア民族学史の研究：江戸時代日本人の観察記録を中心として』恒文社、1986 年 3 月

中村和之「北海道神宮旧蔵『満州古衣』について：蝦夷錦研究覚書(1)」『北海道札幌稲西高等学校研究紀要』第 3 号、1986 年

船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』法政大学出版局、1986 年 4 月

洞富雄『間宮林蔵（人物叢書新装版）』吉川弘文館、1986 年 12 月　＊ 1960 年刊の新装版

1987（昭和 62）年

天野俊也「大野藩のカラフト開拓の一面（上）」『日本』昭和 62 年 3 月号、1987 年 3 月、pp.15-22

天野俊也「大野藩のカラフト開拓の一面（下）」『日本』昭和 62 年 4 月号、1987 年 4 月、pp.41-48

榎森進『日本民衆の歴史　地域編 8　アイヌの歴史：北海道の人びと(2)』三省堂、1987 年 1 月 15 日

榎森進「「蝦夷地」の歴史と日本社会」朝尾直弘ほか編『日本の社会史　第 1 巻：列島内外の交通と国家』岩波書店、1987 年 1 月、pp.311-351

海保嶺夫『中世の蝦夷地』吉川弘文館、1987 年

佐々木史郎「ピウスツキ資料に基づく北サハリンにおける民族関係の研究：サハリン・ギリヤークとアムール・ギリヤーク」『国立民族学博物館研究報告』別冊 5、1987 年、pp.329-346

高倉新一郎編『北海道古地図集成』北海道出版企画センター、1987 年

中村和之「蝦夷錦と山丹交易」『北海道高等学校教育研究会紀要』24 号、1987 年、pp.45-50

藤田覚「蝦夷地第一次上知の政治過程」田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、1987 年 4 月、pp.607-635　＊のち藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005 年所収

松浦茂「清朝辺民制度の成立」『史林』70-4、1987 年 7 月、pp.507-544　＊のち松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006 年 2 月 20 日所収

1988（昭和 63）年

榎森進「研究史の整理と課題」北海道・東北史研究会編『北からの日本史（函館シンポジウム）』三省堂、1988 年 5 月 20 日、pp.12-42

遠藤巌「応永初期の蝦夷反乱：中世国家の蝦夷問題によせて」北海道・東北史研究会編『北からの日本史（函館シンポジウム）』三省堂、1988 年 5 月 20 日、pp.163-181

中村義隆「幕末期越後豪農層の北蝦夷地（樺太）漁場開拓」日本海地域史研究会，村上直編『日本海域史研究』第 8 輯、文献出版、1988 年 10 月 8 日、pp.225-287

間宮林蔵述，村上貞助編，洞富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行他（東洋文庫 484)』平凡社、1988

年 5 月
松浦茂「1980 年以降の中国における清代東北史研究の新動向」『東洋学報』69-3・4、1988 年 3 月、pp.392-402

1989（平成元）年
菊池勇夫「幕末日露関係のなかの樺太アイヌ：「出奔土人」トコンベ一件」『日本歴史』497 号、1989 年 10 月、pp.48-65　＊のち菊池勇夫『北方史のなかの近世日本』校倉書房、1991 年所収
児島恭子「18、19 世紀におけるカラフトの住民：「サンタン」をめぐって」北方言語・文化研究会編『民族接触：北の視点から』六興書房、1989 年、pp.31-47

1990（平成 2）年
秋月俊幸「サハリン島における日本人とアイヌ人：一九世紀中葉のロシア人の報告から」一橋大学社会学部中村喜和研究室共同研究『ロシアと日本　第二集』1990 年 3 月　＊のち井上勝生編『開国（幕末維新論集 2）』吉川弘文館、2001 年 7 月、pp.271-289 所収
榎森進「海峡をはさむ地域史像：ひと・もの・情報」北海道・東北史研究会編『北からの日本史　第 2 集（弘前シンポジウム）』三省堂、1990 年 7 月 20 日、pp.23-57
榎森進「13～16 世紀の東北アジアとアイヌ民族：元・明朝とサハリン・アイヌの関係を中心に」羽下徳彦編『北日本中世史の研究』吉川弘文館、1990 年、pp.223-268
榎森進「13～19 世紀の日本における北方地域の境界認識」『歴史学研究』613 号、1990 年 11 月、pp.2-16
大熊良一『幕末北方関係史考：増補版』近藤出版社、1990 年 4 月 10 日
海保嶺夫「北方交易と中世蝦夷社会」『日本海と北国文化（海と列島文化第 1 巻）』小学館、1990 年 7 月 30 日、pp.255-286
佐々木史郎「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」『国立民族学博物館研究報告』14 巻 3 号、1990 年 2 月 28 日、pp.671-771
佐々木史郎「清朝支配とアムール川下流域住民のエスニシティ」阿部年晴，伊藤亜人，荻原眞子編『民族文化の世界（下）：社会の統合と動態』小学館、1990 年、pp.482-504
田島佳也「北の海に向かった紀州商人：栖原角兵衛家の事跡」『日本海と北国文化（海と列島文化第 1 巻）』小学館、1990 年 7 月 30 日、pp.374-426　＊のち田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』清文堂、2014 年 5 月 29 日所収

1991（平成 3）年
海保嶺夫「『北蝦夷地御引渡目録』について：嘉永 6 年（1853）の山丹交易」『1990 年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館、1991 年 3 月 31 日、pp.1-66
加藤九祚「プチャーチン考」『創価大学人文論集』第 3 巻、1991 年 3 月、pp.3-33
菊池勇夫「北方史研究の現状と課題：国家・境界・民族」『歴史評論』第 500 号、1991 年 12 月、pp.75-92
佐々木史郎「レニングラードの人類学民族学博物館所蔵の満州文書」畑中幸子，原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会、1991 年 1 月、pp.195-216
佐々木史郎「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域：レーヴィン、チェボクサ

ロフの「経済・文化類型」と「歴史・民族誌的領域」の再検討」『国立民族学博物館研究報告』16巻2号、1991年12月28日、pp.261-309

佐々木史郎「アムール川下流域住民の民族構成の研究に関する覚え書き」『民博通信』51、1991年、pp.36-56

中村和之「「経世大典序録」にみえる果夥について」『1990年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館、1991年3月31日、pp.45-51

平川善祥，山田悟郎「「白主土城」の現状について」『1990年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館、1991年3月31日、pp.27-66

北海道新聞社編『蝦夷錦の来た道』北海道新聞社、1991年9月17日

松浦茂「リダカとトジンガ」『鹿大史学（鹿児島大学法文学部）』第38号、1991年1月31日、pp.17-26

松浦茂「18世紀末アムール川下流地方の辺民組織」『人文学科論集（鹿児島大学法文学部）』第34号、1991年10月、pp.65-112　＊のち松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006年2月20日に所収

1992（平成4）年

榎森進「オモロとユーカㇻ」荒野泰典ほか編『アジアのなかの日本史4：地域と民族』東京大学出版会、1992年9月25日、pp.251-285

榎森進「日露和親条約と幕府の領土観念」渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社、1992年、pp.383-405

榎森進「周辺諸国と変容するアイヌ社会」『新版古代の日本⑨　東北・北海道』角川書店、1992年、pp.493-514

大石直正「北からの日本中世」『歴史と地理』第445号、1992年9月、pp.1-15

金森正也『秋田藩の政治と社会』無明舎出版、1992年

田中忠三郎監修『佐井村海峡ミュウジアム』佐井村海峡ミュウジアム、1992年3月25日

中村和之「「北からの蒙古襲来」小論：元朝のサハリン侵攻をめぐって」『史朋（北海道大学東洋史談話会）』25号、1992年5月、pp.1-9

中村和之「トジンガの家系について」『北大史学』第32号、1992年8月10日、pp.15-20

藤田覚「鎖国祖法観の成立過程」渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社、1992年、pp.275-292　＊のち藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005年所収

松浦茂「間宮林蔵の著作から見たアムール川最下流域地方の辺民組織」神田信夫先生古希記念論集編集編纂委員会編『清朝と東アジア』山川出版社、1992年、pp.147-167

1993（平成5）年

会津武家屋敷編『北のまもりと開拓：会津藩と北海道』会津武家屋敷、1993年

海保嶺夫「中国と日本列島北部の動向：13世紀後半～14世紀前半を中心に」『1992年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館、1993年、pp.101-114

ドイツ東洋文化研究協会編『西洋人の描いた日本地図：ジパングからシーボルトまで』ドイツ東洋文化研究協会、1993年

麓慎一「幕末における蝦夷地政策と樺太問題：1859（安政6）年の分割分領政策を中心に」『日本史

研究』371号、1993年7月、pp.25-51

1994（平成6）年

秋月俊幸『日露関係とサハリン島：幕末明治初年の領土問題』筑摩書房、1994年6月30日

菊池勇夫「鷲羽と北方交易」『研究年報（宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所）』27号、1994年3月、pp.25-49　＊のち菊池勇夫『アイヌと松前の政治文化論：境界と民族』校倉書房、2013年5月25日所収

菊池勇夫『アイヌ民族と日本人：東アジアのなかの蝦夷地』朝日新聞社、1994年9月25日

児島恭子「日本文化史における蝦夷錦研究の資料と課題」『学苑（昭和女子大学）』660号、1994年、pp.94-102

佐々木史郎「北海の交易：大陸の情勢と中世蝦夷の動向」朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史　第10巻・中世4』岩波書店、1994年11月、pp.320-339

瀧本壽史「弘前藩蝦夷地警備関係史料『忍ぶ草』」『市史ひろさき』第3号、1994年3月31日、pp.3-12

瀧本壽史「弘前藩宗谷陣屋をめぐって」『市史ひろさき』第3号、1994年3月31日、pp.88-107

麓慎一「慶応期における蝦夷地政策と樺太問題」『北方史の新視座：対外政策と文化』雄山閣、1994年、pp.181-197

松浦茂「十七世紀以降の東北アジアにおける経済交流」『松村潤先生古稀記念　清代史論叢』汲古書院、1994年、pp.35-67

ロバート・G・フラーシェム，ヨシコ・N・フラーシェム『蝦夷地場所請負人：山田文右衛門家の活動とその歴史的背景』北海道出版企画センター、1994年5月

1995（平成7）年

秋月俊幸「日露関係の黎明」『講座スラブの世界⑧　スラブと日本』弘文堂、1995年、pp.3-25

榎森進，菊池俊彦，桑原真人「地方史研究の現状9：北海道上」『日本歴史』561号、1995年2月、pp.34-51

榎森進，菊池俊彦，桑原真人「地方史研究の現状10：北海道下」『日本歴史』562号、1995年3月、pp.33-66

榎森進「アイヌ民族と安藤氏」小口雅史編『津軽安藤氏と北方世界（藤崎シンポジウム北の中世を考える）』河出書房新社、1995年3月24日、pp.214-254

海保嶺夫「山丹交易と辺民制度：初期露清関係史の視点より」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、1995年3月31日、pp.193-218

菊池勇夫「海防と北方問題」『岩波講座日本通史　第14巻』岩波書店、1995年1月、pp.221-252　＊のち菊池勇夫『アイヌと松前の政治文化論：境界と民族』校倉書房、2013年5月25日所収

児島恭子「山丹交易とカラフト諸民族の状況」『昭和女子大学国際文化研究所』2、1995年、pp.11-17

小林真人「松前藩による山丹交易品の独占とその流通」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、1995年3月31日、pp.245-267

佐々木利和『アイヌの工芸（日本の美術第354号）』至文堂、1995年11月15日

出利葉浩司「狩猟具からみた北海道アイヌおよび北東アジア諸民族の小型毛皮獣狩猟活動の意味：

とくに罠・仕掛け弓の比較検討をとおして」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、1995年3月31日、pp.305-331
福島県立博物館編『図録　海のまくあけ：漂流・探検・海防、そして開国』福島県立博物館、1995年
藤田覚「19世紀前半の日本：国民国家形成の前提」朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史　第15巻：近世5』岩波書店、1995年5月、pp.1-67　＊のち藤田覚『近世政治史と天皇』吉川弘文館、1999年9月10日、pp.1-64所収
麓慎一「幕末における蝦夷地上知過程と樺太問題」『歴史学研究』No.671、1995年6月、pp.1-16、35
矢島睿「山丹交易の研究史とその諸問題」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、1995年3月31日、pp.181-192
矢島睿「山丹交易品蝦夷錦の名称と形態」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、1995年3月31日、pp.287-304

1996（平成8）年
秋月俊幸「日本北辺地図にみる東西の接触：欧州の航海者たちが利用した松前藩の『蝦夷地図』」北海道・東北史研究会編『メナシの世界（根室シンポジウム「北からの日本史」）』北海道出版企画センター、1996年6月5日、pp.44-76
榎森進「13〜17世紀のアイヌ民族と周辺諸国・諸民族」『中世史講座11　中世における地域・民族の交流』学生社、1996年、pp.344-381
佐々木史郎『北方から来た交易民：絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会、1996年6月
藤田覚「文化三・四年日露紛争と松平定信：松平定信「蝦夷地一件意見書草案」の紹介をかねて」『東京大学史料編纂所研究紀要』第6号、1996年3月、pp.50-65　＊のち藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005年所収
船越昭生「こだまする地図：ライデン大学図書館蔵シーボルト・コレクションの一図から」『史窓（京都女子大学史学会）』第53号、1996年
北海道開拓記念館編『山丹交易と蝦夷錦（第42回特別展図録）』北海道開拓記念館、1996年6月1日
松浦茂「18世紀アムール川下流地方のホジホン」『東洋史研究』55-2、1996年9月、pp.358-394
楊暘（土井徹，中村和之訳）「明代の東北アジアシルクロードと文化現象としての蝦夷錦」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5号、1996年、pp.131-147

1997（平成9）年
秋月俊幸「日本北辺の地図史から見た初期の日露関係」『ロシア研究』No.25、1997年、pp.56-72
榎森進『増補改訂　北海道近世史の研究：幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター、1997年4月28日　＊「ユーカラの歴史的背景に関する一考察：主に邦訳ユーカラを素材に」pp.19-70　＊「オモロとユーカラ」pp.71-106　＊「北海道近世史研究の動向：1970年代以降を中心に」pp.495-519所収
佐々木史郎「18、19世紀におけるアムール川下流域の住民の交易活動」『国立民族学博物館研究報告』22巻4号、1997年、pp.683-763

谷本晃久「幕末期、長崎阿蘭陀通詞の蝦夷地行：名村五八郎『蝦夷并カラフト島野日記』を題材に」『歴史と地理（山川出版社）』第508号、1997年12月20日、pp.49-63
中村和之「十三～十六世紀の環日本海地域とアイヌ」大隅和雄，村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、1997年7月30日、pp.145-178
麓慎一「幕末の樺太における領土問題と場所請負商人：クリミヤ戦後の樺太開発を中心に」北海道・東北史研究会編『場所請負制とアイヌ：近世蝦夷地史の構築をめざして』北海道出版企画センター、1998年12月21日、pp.140-173
松浦茂「ネルチンスク条約直後清朝のアムール川左岸調査」『史林』第80巻第5号、1997年9月、pp.714-744

1998（平成10）年
佐々木史郎「山丹交易と山丹人」秋道智弥編『海人の世界』同文館、1998年、pp.237-259
麓慎一「蝦夷地第二次直轄期のアイヌ政策」『北大史学』第38号、1998年11月、pp.49-66　＊のち井上勝生編『幕末維新論集②　開国』吉川弘文館、2001年所収
松浦茂「17世紀アムール川中流地方の経済活動」『東方学（東方学会）』第95輯、1998年1月30日、pp.94-109

1999（平成11）年
秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学出版会、1999年7月25日
板橋政樹「サハリン・樺太史研究について：領土問題を中心に」竹田正直編『サハリン州の総合研究』第1集、1999年3月15日、pp.17-45
榎森進「松花江流域出土の「寛永通宝」、その歴史的背景」『東北学院大学東北文化研究所紀要』31号、1999年8月、pp.15-47
谷本晃久「史料紹介　名村五八郎『蝦夷并カラフト島野日記』」『学習院大学史料館紀要』第10号、1999年3月31日、pp.219-257
中村和之「アイヌ語のkotanと13世紀の中国史料にみえる骨嵬」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第5号、1999年3月、pp.21-31
中村和之「北の「倭寇的状況」とその拡大」入間田宣夫，小林真人，斉藤利男編『北の内海世界：北奥羽・蝦夷ケ島と地域諸集団』山川出版社、1999年7月30日、pp.178-198
藤田覚『近世政治史と天皇』吉川弘文館、1999年9月10日
松浦茂「清朝のアムール地方統治：清朝が貂皮の徴収に派遣した旗人」『京都大学総合人間学部紀要』6、1999年、pp.1-21
松浦茂「東北アジアの歴史と文化」竺沙雅章監修，若松寛責任編集『アジアの歴史と文化7　北アジア史』同朋舎、1999年4月20日、pp.148-167

2000（平成12）年
大野延胤「宇田川榕菴蔵張込帖所載のカラフト図について」『一滴（津山洋学資料館）』第8号、2000年、pp.1-23
佐々木史郎「アイヌとその隣人たちの毛皮獣狩猟：ロシア極東先住民族のクロテン用の罠を中心として」『アジア遊学』17号、勉誠出版、2000年6月、pp.42-55

高木崇世芝『北海道の古地図：江戸時代の北海道のすがたを探る（函館文化発見企画 2）』五稜郭タワー株式会社、2000 年 7 月 4 日
田端宏「蝦夷地、北蝦夷地について：蝦夷地観をめぐって」『北海道立文書館研究紀要』第 15 号、2000 年 3 月、pp.1-34
速水融「徳川幕府のカラフト先住民人口調査」『麗澤大学紀要』第 71 号、2000 年 12 月、pp.55-78
藤田覚「近世後期の情報と政治：文化年間日露紛争を素材として」『東京大学日本史学研究室紀要』第 4 号、2000 年 3 月 28 日、pp.49-70　＊のち藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005 年所収
藤田覚「対外関係の伝統化と鎖国祖法観の確立」藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、2000 年 11 月 10 日、pp.187-218　＊のち藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005 年所収
松浦茂「ウリンの輸送問題と辺民制度の改革」『京都大学総合人間学部紀要』 7 、2000 年、pp.47-66

2001（平成 13）年

榎森進「アイヌ民族の去就（北奥からカラフトまで）：周辺民族との「交易」の視点から」網野善彦，石井進編『北から見直す日本史：上之国勝山館跡と夷王山墳墓群からみえるもの』大和書房、2001 年 6 月 5 日、pp.27-124
大石直正「北の周縁、列島東北部の興起」『周縁から見た中世日本（日本の歴史第 14 巻）』講談社、2001 年 12 月 10 日、pp.13-140
大塚和義編『ラッコとガラス玉：北太平洋の先住民交易』財団法人千里文化財団、2001 年 9 月 17 日
佐々木史郎「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」『国立民族学博物館研究報告』26 巻 1 号、2001 年、pp.1-78
佐々木史郎「山丹交易と海上・河川交通」『歴史学研究』No.756、2001 年 11 月、pp.33-45
中村和之「“北からの蒙古襲来”の真相」『歴史読本』第 46 巻第 6 号、2001 年 6 月 1 日、pp.176-191
松浦茂「1709 年イエズス会士レジスの沿海地方調査」『史林』第 84 巻第 3 号・427 号、2001 年、pp.77-108　＊のち松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006 年 2 月 20 日所収
松本英治「オランダ商館長ドゥーフとフヴォストフ文書」『一滴（津山洋学資料館）』第 9 号、2001 年、pp.77-106　＊のち松本英治『近世後期の対外政策と軍事・情報』吉川弘文館、2016 年 9 月所収

2002（平成 14）年

会津若松市『会津藩政の改革：五代から八代まで（会津若松市史 6 ：歴史編⑥近世 3）』会津若松市、2002 年 3 月 28 日
東俊佑「近世後期カラフト探検と北東アジア情報：間宮林蔵の探検とその関係史料の再評価に向けて」『アジア文化史研究（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻）』第 2 号、2002 年 3 月 20 日、pp.1-18
キリチェンコ A.A.，伊賀上菜穂訳「海賊船ユノナ号とアヴォシ号：ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』第 6 号、2002 年 3 月 31 日、pp.77-102
出利葉浩司「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」佐々木史郎編『開かれた系とし

ての狩猟採集社会（国立民族学博物館調査報告34）』、2002年12月、pp.97-164
中村和之「14世紀アムールランドのそりと履板」『民博通信』No.96、国立民族学博物館、2002年3月、pp.24-34
中村和之「アイヌの沈黙交易について」『第16回北方民族文化シンポジウム報告』北方文化振興協会、2002年、pp.13-18

2003（平成15）年

会津若松市『会津の幕末維新：京都守護職から会津戦争（会津若松市史7：歴史編④近世4)』会津若松市、2003年3月31日
青森県立郷土館編『蝦夷錦と北方交易（開館30周年記念特別展)』青森県立郷土館、2003年9月
東俊佑「サハリン島をさす呼称：「カラフト」の語源に関する覚書」『アジア文化史研究（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻)』第3号、2003年3月20日、pp.19-37
榎森進編『アイヌの歴史と文化１』創童舎、2003年2月
榎森進「北東アジアから見たアイヌ」菊池勇夫編『日本の時代史19　蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、2003年12月10日、pp.126-166
大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版、2003年2月14日
川上淳「日露関係のなかのアイヌ」菊池勇夫編『日本の時代史19　蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、2003年12月10日、pp.260-293
川村博忠『近世日本の世界像』ぺりかん社、2003年12月24日
菊池勇夫「蝦夷島と北方世界」菊池勇夫編『日本の時代史19　蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、2003年12月10日
関根達人，柴正敏「蝦夷錦の品質と年代：赤地牡丹文蝦夷錦の分析を中心に」『青森県史研究』第8号、2003年12月、pp.101-119
中村和之「元朝のサハリン進出をめぐる北方先住民の動向」前川要編『中世総合資料学の提唱：中世考古学の現状と課題』新人物往来社、2003年3月、pp.141-147
中村和之「最上徳内『唐太島』について」『弘前大学國史研究』114号、2003年3月、pp.38-50
ニコライ・ブッセ著，秋月俊幸訳『サハリン島占領日記1853-54：ロシア人の見た日本人とアイヌ（東洋文庫)』平凡社、2003年4月
西村三郎『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店、2003年2月17日
林昇太郎「史料紹介　小林豊章筆『唐太島東西浜図』について⑴」『「北方文化共同研究事業」2000-2002年度調査報告』北海道開拓記念館、2003年3月31日、pp.41-68
藤田覚「近代の胎動」藤田覚編『日本の時代史17　近代の胎動』吉川弘文館、2003年10月10日、pp.8-86
松浦茂「18世紀のサハリン交易とキジ事件」『京都大学総合人間学部紀要』10、2003年、pp.19-40
松浦茂「1727年の北京会議と清朝のサハリン中・南部進出」『史林』86⑵・438号、2003年3月、pp.176-208
楊暘（土井徹，中村和之訳)「明代の東北アジア・シルクロード」『史朋（北海道大学東洋史談話会)』第36号、2003年12月、pp.18-31

2004（平成 16）年

青森県立郷土館編『蝦夷錦と北方交易［改訂版］（開館 30 周年記念特別展）』青森県立郷土館、2004 年 3 月 31 日

東俊佑「近世後期カラフト探検と北東アジア情報：間宮林蔵観の変遷を中心に」『環オホーツク（北の文化シンポジウム実行委員会）』No.11、2004 年 3 月 31 日、pp.55-64

有泉和子「フヴォストフ・ダヴィドフ事件と日本の見方：ロシアの貿易利害との関連で」『ロシア語ロシア文学研究（日本ロシア文学会）』36、2004 年、pp.119-126

有泉和子「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」『Slavistika（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）』19、2004 年、pp.184-203

榎森進編『アイヌの歴史と文化 2』創童舎、2004 年 4 月

及川将基「日露領土交渉のなかの「是迄仕来」：条約文の解釈と領土観」『史苑（立教大学）』第 65 巻第 1 号、2004 年 11 月 9 日、pp.33-57

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『樺太アイヌ民族誌：工芸に見る技と匠』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、2004 年 7 月 17 日

佐々木利和『アイヌ絵誌の研究』草風館、2004 年 2 月 20 日

中村和之「中世における北方からの人の流れとその変動：白主土城をめぐって」『歴史と地理（日本史の研究 207）』580 号、2004 年 12 月、pp.1-14

松浦茂編『13 世紀以降のアムール川下流・サハリン地方に関する研究』（科研成果報告書）、2004 年 3 月 10 日　＊松浦茂「繊維製品の流入と辺民社会」pp.13-37　＊松浦茂「満洲語檔案に現れる北方少数民族の言語」pp.39-49

三浦泰之，東俊佑「『松本吉兵衛紀行絵巻』について：安政 6 年（1859）秋田藩士の蝦夷地紀行」『北海道開拓記念館調査報告』第 43 号、2004 年 3 月 31 日、pp.89-128

2005（平成 17）年

東俊佑「嘉永年間におけるカラフトをめぐる動向」『18 世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化：北方文化共同研究事業研究報告』北海道開拓記念館、2005 年 3 月 31 日、pp.335-362

東俊佑「幕末カラフトにおける蝦夷通詞と幕府の蝦夷地政策」『北海道・東北史研究』第 2 号、2005 年 12 月 20 日、pp.19-34

石黒正英『にいがたボロボロ草』新潟雪書房、2005 年

佐々木史郎「山丹交易と蝦夷地・日本海域」小林昌二監修，長谷川誠一・千田嘉博編『日本海域歴史大系　第 4 巻（近世篇 1）』清文堂出版、2005 年 9 月 25 日、pp.251-278

佐々木史郎「北東アジアの河川、海上交通とその拠点：「満洲仮府」デレンの繁栄」歴史学研究会編『港町と海域世界（シリーズ港町の世界史 1）』青木書店、2005 年 12 月 20 日、pp.11-47

中村和之「十五世紀のサハリン・北海道の交易」東北中世考古学会編『海と城の中世』高志書院、2005 年 10 月、pp.227-246

中村和之「大陸から見た中世日本の北方地域」矢田俊文，工藤清泰編『日本海域歴史大系　第 3 巻（中世篇）』清文堂出版、2005 年 6 月 25 日、pp.77-102

林昇太郎「史料紹介　小林豊章筆『唐太島東西浜図について⑵』」『18 世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化：北方文化共同研究事業研究報告』北海道

開拓記念館、2005年3月31日、pp.91-115
藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005年
三浦泰之，東俊佑「松前藩家臣の由緒書：『近藤家由緒書』について」『北海道開拓記念館調査報告』第44号、2005年3月31日、pp.143-188

2006（平成18）年

会津若松市『会津藩第七代藩主：松平容衆年譜付文化五年会津藩蝦夷地出陣関係史料（会津若松市史・史料編Ⅳ）』会津若松市、2006年
秋田俊一「史料紹介　樺太南部を中心とした栖原家家譜」北海道史研究協議会編『北海道の歴史と文化：その視点と展開』北海道出版企画センター、2006年7月8日、pp.167-177
秋田県公文書館古文書班編『秋田藩の海防警備（平成18年度秋田県公文書館企画展リーフレット）』秋田県、2006年8月25日
東俊佑「北蝦夷地在住・栗山太平の活動」『北海道開拓記念館研究紀要』第34号、2006年3月31日、pp.57-80
東俊佑「知られざるカラフト調査行・栗山太平」『都道府県展望』No.576、2006年9月24日、p.24
榎森進『13～19世紀における列島北方地域史とアムール川流域文化の相互関連に関する研究』（科研成果報告書）、2006年3月
大塚和義「松田傳十郎『阿迪埜躍之記』の紹介と若干の考察」北海道史研究協議会編『北海道の歴史と文化：その視点と展開』北海道出版企画センター、2006年7月8日、pp.179-190
後藤富貴「秋田県公文書館所蔵の蝦夷地警備関係史料」『秋田県公文書館研究紀要』第12号、2006年3月、pp.101-125
佐々木史郎「サンタンとスメレンクル」天野哲也，臼杵勲，菊池俊彦編『北方世界の交流と変容：中世の北東アジアと日本列島』山川出版社、2006年8月、pp.12-55
高倉浩樹「18～19世紀の北太平洋世界における樺太先住民交易とアイヌ」菊池勇夫，真栄平房昭編『列島史の南と北（近世地域史フォーラム1）』吉川弘文館、2006年11月1日、pp.164-189
瀧本壽史「蝦夷錦の来た道：青森県内所在の蝦夷錦を通して」小林昌二監修，原直史・大橋康二編『日本海域歴史大系　第5巻近世篇Ⅱ』清文堂、2006年6月20日、pp.91-112
瀧本壽史「海峡を越える地域間交流」菊池勇夫，真栄平房昭編『列島史の南と北（近世地域史フォーラム1）』吉川弘文館、2006年11月1日、pp.164-189
中村和之「亦失哈の遠征と明朝の北東アジア支配」小野正敏ほか編『中世の対外交流：場・ひと・技術』高志書院、2006年7月、pp.110-119
中村和之「金・元・明朝の北東アジア政策と日本列島」天野哲也，臼杵勲，菊池俊彦編『北方世界の交流と変容：中世の北東アジアと日本列島』山川出版社、2006年8月、pp.100-121
檜皮瑞樹「幕末期樺太におけるアイヌ支配の揺らぎと再編成：トコンベ出奔事件をめぐって」『史観（早稲田大学史学会）』第155冊、2006年9月、pp.18-35　＊のち檜皮瑞樹『仁政イデオロギーとアイヌ統治』有志舎、2014年1月所収
松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、2006年2月20日
松本あづさ，三浦泰之，東俊佑「近藤家資料のなかの異国船関係史料」『北海道開拓記念館調査報告』第45号、2006年3月31日、pp.205-242

2007（平成 19）年

ブレット・ウォーカー著，秋月俊幸訳『蝦夷地の征服 1590-1800：日本の領土拡張にみる生態学と文化』北海道大学出版会、2007 年 2 月 28 日

東俊佑「幕末期北蝦夷地における大野藩のウショロ場所経営」『北海道開拓記念館研究紀要』第 35 号、2007 年 3 月 31 日、pp.67-86

榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館、2007 年 7 月

クリモワ・オリガ「ロシア史料に見るフヴォストフ海軍中尉とダヴィドフ海軍少尉が行った 1807 年度第 2 回サハリン遠征とロシア政府の対応」『日本語・日本文化』第 33 号、2007 年 5 月、pp. 109-124

後藤富貴「秋田県公文書館所蔵「蝦夷地目録」について」『秋田県公文書館研究紀要』第 13 号、2007 年 3 月、pp.113-147

瀧本壽史「蝦夷錦をめぐる社会史：青森県内所在の蝦夷錦を通して」長谷川成一監修『北方社会史の視座：歴史・文化・生活第 1 巻』清文堂、2007 年 12 月 20 日、pp.89-108

前川要編『北東アジア交流史研究：古代と中世』塙書房、2007 年 2 月　＊前川要「白主土城の発掘調査」　＊アレクサンダー・ワシレフスキー「白主土城の国際研究に見る中世サハリン研究の諸問題と展望と戦略」　＊中村和之「白主土城をめぐる諸問題」　＊アレクサンダー・アルテミエフ「アムール下流の 13～15 世紀仏教寺院の調査総括」　＊中村和之「奴児干永寧寺の研究と課題」

中村和之「李志恒『漂舟録』にみえる「羯悪島」について」『史朋（北海道大学東洋史談話会）』39 号、2007 年 3 月、pp.1-6

畑中康博「幕末秋田藩海岸警備考：守備兵の問題を中心として」『秋田県公文書館研究紀要』第 13 号、2007 年 3 月、pp.93-112

麓慎一「日魯通好条約について：日露交渉と E・B・プチャーチンへの訓示を中心に（日露関係史料をめぐる国際研究集会 2006）」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 17 号、2007 年 3 月、pp.163-175

松浦茂『清朝の『皇輿全覧図』作製とその世界史的な意義に関する研究』（科研成果報告書）、2007 年 3 月

2008（平成 20）年

（財）会津若松市観光公社『平成 20 年度若松城天守閣郷土博物館夏季企画展　会津藩　蝦夷地を守る：北方警備二百年記念』2008 年

東俊佑「北蝦夷地全島一周をめざして：付、栗山太平の北蝦夷地調査記録」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史：2005-07 年度調査報告』北海道開拓記念館、2008 年 3 月 31 日、pp. 235-260

榎森進，小口雅史，澤登寛聡編『エミシ・エゾ・アイヌ（アイヌ文化の成立と変容：交易と交流を中心として上）』岩田書院、2008 年 11 月　＊久保泰「松前家の家宝「銅雀台瓦硯」について」

榎森進，小口雅史，澤登寛聡編『北東アジアのなかのアイヌ世界（アイヌ文化の成立と変容：交易と交流を中心として下）』岩田書院、2008 年 11 月　＊榎森進「北東アジアのなかのアイヌ世界」　＊中村和之，小田寛貴「北東アジアのなかのアイヌ社会　蝦夷錦と北のシルクロード」　＊佐々木史郎「東アジアの歴史世界におけるアイヌの役割」　＊関根達人「タマサイ・ガラス玉に関す

る型式学的検討」　＊瀧本壽史「青森県内所在の蝦夷錦について」

中村和之「アイヌの北方交易とアイヌ文化：銅雀台瓦硯の再発見をめぐって」加藤雄三，大西秀之，佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史：周縁地域における社会制度の形成』人文書院、2008年3月10日、pp.63-82

菊池俊彦，中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ：奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界』高志書院、2008年2月　＊楊暘「奴児干都司と明朝の北方政策：永寧寺碑文と北東アジア」　＊中村和之「モンゴル時代の東征元帥府と明代の奴児干都司」　＊榎森進「明朝のアムール政策とアイヌ民族」　＊アレクサーンドル＝R.アルテーミエフ「永寧寺の発掘をめぐって：アムール川下流域における十三〜十五世紀の仏教寺院」　＊三宅俊彦，アレクサーンドル＝L.イーヴリエフ「北東アジアの銭貨流通」　＊瀬川拓郎「大陸・サハリン・日本列島の交流：サハリン＝アイヌの成立」　＊山口欧志，井出靖夫「サハリン白主土城」

関根達人，市毛幹幸「カラフトアイヌ供養・顕彰碑と嘉永六年クシュンコタン占拠事件」『弘前大学国史研究』第124号、2008年3月30日、pp.1-22

添田仁「幕末ハウトンマカ一件と大野藩」『越前町織田文化歴史館館報』第3号、越前町織田文化歴史館、2008年3月31日、pp.38-42

中村和之『蝦夷錦の制作年代と流通に関する研究』（科研成果報告書）、2008年3月

本間はるか「幕末における北東アジア諸民族の交流について：主に「サンタン人」とカラフトアイヌを中心に」『アジア文化史研究（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻）』第8号、2008年、pp.11-46

三浦泰之，東俊佑，松本あづさ「近藤家資料のなかの書簡⑵：嘉永七年幕吏巡見随行関係文書」『北海道開拓記念館調査報告』第47号、2008年3月31日、pp.163-232

三浦泰之，山本命，東俊佑「近世後期から近代初期に形成された知識人ネットワークに関する基礎研究：2007（平成19）年度調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』第47号、2008年3月31日、pp.71-86

三木理史「20世紀日本における樺太論の展開」『地理学評論』81巻4号、2008年、pp.197-214

森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易：16〜19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』彩流社、2008年11月5日

A.R.アルテーミエフ著，菊池俊彦・中村和之監修，垣内あと訳『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文：15世紀の北東アジアとアイヌ民族』北海道大学出版会、2008年4月10日

2009（平成21）年

東俊佑「北蝦夷地における直捌の展開と越後差配人の漁場開設」『北海道開拓記念館研究紀要』第37号、2009年3月31日、pp.165-200

東俊佑「北東アジアの歴史文化に関する近年の研究動向；4つの科研報告書をもとに」『北海道・東北史研究』2009（通巻第5号）、2009年4月30日、pp.64-69

伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』吉川弘文館、2009年4月1日

田島佳也「「海民的」企業家・時国左門の秘められた北方交易：幕末、時国家の廻船交易の検討」神奈川大学常民文化研究所編『海と非農業民：網野史学の学問的軌跡をたどる』岩波書店、2009年、pp.149-160　＊のち田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』清文堂、2014年5月29日所収

長澤政之「場所請負制下、道東アイヌ社会：ネモロ（根室）場所アイヌの生業活動の実態とその変容を中心に」『千島列島に生きる：アイヌと日露・交流の記憶（第24回特別展環北太平洋の文化Ⅳ）』北海道立北方民族博物館、2009年7月17日、pp.17-20

中村和之，小田寛貴「ヌルガン都司の設置と先住民との交易：銅雀台瓦硯と蝦夷錦をめぐって」天野哲也，池田榮史，臼杵勲編『中世東アジアの周縁世界』同成社、2009年11月、pp.179-189

中村和之「蝦夷錦、北方での清朝と日本の交流」『清朝とは何か（別冊環16）』藤原書店、2009年5月30日、pp.262-270

速水融「幕末カラフトの人口構造」『歴史人口学研究：新しい近世日本像』藤原書店、2009年10月22日、pp.333-358

檜皮瑞樹「19世紀樺太をめぐる「国境」の発見：久春内幕吏捕囚事件と小出秀実の検討から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第54輯、2009年2月28日、pp.17-31　＊のち檜皮瑞樹『仁政イデオロギーとアイヌ統治』有志舎、2014年1月所収

麓慎一「日本開国期における帝政ロシアのサハリン島政策」『東京大学資料編纂所研究紀要』第19号、2009年3月、pp.117-126

松浦茂「文化５・６年松田・間宮の北辺調査」『アジア史学論集』２、2009年6月、pp.1-18

2010（平成22）年

東俊佑「幕末のサンタン交易について」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史：北方文化共同研究報告』北海道開拓記念館、2010年3月31日、pp.195-226

東俊佑「間宮林蔵と栗山太平」『とどまつ（社団法人北海道開拓記念館・北海道開拓の村文化振興会会報）』No.34（通巻57号）、2010年3月30日、pp.4-9

榎森進『15～19世紀、列島北方地域とアムール川最下流域の諸民族との交流に関する研究（科研成果報告書）』、2010年3月

大石直正『中世北方の政治と社会』校倉書房、2010年7月30日

小野寺龍太『栗本鋤雲：大節を堅持した亡国の遺臣（ミネルヴァ日本評伝選）』ミネルヴァ書房、2010年4月10日

越田賢一郎「ガラス玉の道」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010年12月25日、pp.431-453

故林昇太郎氏遺作論集刊行会編『アイヌ絵とその周辺：林昇太郎美術史論集』故林昇太郎氏遺作論集刊行会、2010年2月25日

佐々木史郎「サンタン交易の経済学」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010年12月25日、pp.515-536

谷本晃久「帳簿の概要とアイヌ交易研究」『東京大学史料編纂所研究紀要』第20号、2010年3月19日、pp.161-169

谷本晃久「幕末・維新期の松前蝦夷地とアイヌ社会」明治維新史学会編『講座　明治維新１　世界史のなかの明治維新』有志舎、2010年12月30日、pp.160-190

谷本晃久「“近世アイヌ史”をとりまく国際的環境」『新しい歴史学のために』No.277、京都民科歴史部会、2010年10月、pp.17-28

中村和之「「北からの蒙古襲来」をめぐる諸問題」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010年12月25日、pp.413-430

中村和之「山丹交易の源流」荒野泰典，石井正敏，村井章介編『日本の対外関係 4　倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、2010 年 7 月 20 日、pp.255-272

保谷徹「サハリン・アイヌ交易帳簿の「発見」と共同プロジェクト」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 20 号、2010 年 3 月 19 日、pp.149-150

本間はるか「幕末における日露両国のカラフト（サハリン・北蝦夷地）支配に関する一考察：カラフト先住民に対する両者の対応を中心に」『アジア文化史研究（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻）』第 10 号、2010 年 3 月、pp.1-23

松浦茂「『秘帳坎々奇話』と『北征秘談』」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010 年 12 月 25 日、pp.553-558

ワジム・クリモフ「サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所（旧東洋学研究所）所蔵の交易帳簿について」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 20 号、2010 年 3 月 19 日、pp.151-154

2011（平成 23）年

榎森進「地方史研究の現在（北方史）」『地方史研究』第 61 巻第 2 号・350 号、2011 年 4 月 1 日、pp.29-32

佐々木史郎「ヘジェ・フィヤカ・エゾ：近世における日本と中国の北方民族に対する認識」佐々木史郎，加藤雄三編『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』有志舎、2011 年 3 月 30 日、pp.178-211

シニーツィン・アレクサンドル「ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館（クンストカーメラ）が蒐集したフヴォストフ・ダヴィドフ遠征関係資料について（日露関係史料をめぐる国際研究集会報告）」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 21 号、2011 年 3 月、pp.102-114

高木崇世芝『近世日本の北方図研究』北海道出版企画センター、2011 年 11 月 25 日

長澤政之「藤野家文書「覚」にみる軽物の流通に関する一考察」『北方島文化研究』第 9 号、2011 年 10 月、pp.33-38

永野正宏「1857～1859 年における箱館奉行による種痘の再検討」『北方人文研究（北海道大学北方研究教育センター）』第 4 号、2011 年 3 月、pp.1-23

中村和之「骨嵬・苦兀・庫野：中国の文献に登場するアイヌの姿」佐々木史郎，加藤雄三編『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』有志舎、2011 年 3 月 30 日、pp.125-146

長沼孝，越田賢一郎，榎森進，田端宏，池田貴夫，三浦泰之『新版北海道の歴史　上（古代・中世・近世編）』北海道新聞社、2011 年 11 月

2012（平成 24）年

関根達人「場所図・古地図にみる 1850 年代の樺太（サハリン）島における先住民族と国家：目賀田帯刀筆「北海道歴検図」の検討を中心として」『北海道・東北史研究』第 8 号、2012 年、pp.24-56

関根達人「江戸時代に樺太で亡くなった人々：「白主村墓所并死亡人取調書上」の検討」『弘前大学国史研究』第 133 号、2012 年 10 月、pp.15-26

中村和之「北・東北アジアの先住民族と環オホーツク海・環日本海交流圏」姫田光義編『北・東北アジア地域交流史』有斐閣、2012 年 7 月 30 日、pp.23-48

中村和之「謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイナウカサについて」『史朋（北海道大学東洋史談話会）』第 45 号、2012 年 12 月、pp.1-17
麓慎一「確定される『国境』と地域」荒野泰典，石井正敏，村井章介編『日本の対外関係 7　近代化する日本』吉川弘文館、2012 年 4 月 10 日、pp.143-167
松浦茂「高橋景保『北夷考証』の成立と北方地理学の進展」『アジア史学論集（京都大学大学院人間・環境学研究科）』 5 、2012 年 2 月、pp.19-40
王中忱「間宮林蔵は北の大地で何を見たのか」姫田光義編『北・東北アジア地域交流史』有斐閣、2012 年 7 月 30 日、pp.237-263

2013（平成 25）年

東俊佑，白石英才「ニヴフの交易活動に係る聴き取りと物質文化資料の調査について：2010 年度調査報告」『北海道開拓記念館研究紀要』第 41 号、2013 年 3 月 31 日、pp.107-146
東俊佑「近世蝦夷地交易品ノート⑴：17～18 世紀アイヌ生産品を中心に」『北方地域の人と環境の関係史　2010-12 年度調査報告』北海道開拓記念館、2013 年 3 月、pp.97-184
榎森進「「日露和親条約」がカラフト島を両国の雑居地としたとする説は正しいか？」『東北学院大学東北文化研究所』45 号、2013 年 12 月、pp.1-22
菊池勇夫『アイヌと松前の政治文化論：境界と民族』校倉書房、2013 年 5 月 25 日
佐々木史郎「近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン、ギンギツネの流通と狩猟方法」『北海道大学総合博物館研究報告』第 6 号、2013 年 3 月、pp.86-102
佐々木史郎「一九世紀の国境策定と先住民：アムール、樺太、千島における日ロ中のせめぎあいの中で」『東アジア近代史（東アジア近代史学会）』16 号、2013 年 3 月、pp.23-44
谷本晃久「19 世紀蝦夷地における「境域」としての可能性」『歴史学研究』No.911、2013 年 10 月、pp.2-10
中村和之，森岡健治，竹内孝「北海道におけるがガラス玉の流入とその背景：北海道平取町から出土した資料を中心に」『北海道大学総合博物館研究報告』第 6 号、2013 年 3 月、pp.58-66
三宅俊彦「サハリン出土の銭貨」『北海道大学総合博物館研究報告』第 6 号、2013 年 3 月、pp.66-85

2014（平成 26）年

秋月俊幸『千島列島をめぐる日本とロシア』北海道大学出版会、2014 年 5 月 25 日
東俊佑「村垣家所蔵の蝦夷地巡視関係巻子本について」『東京大学史料編纂所画像史料センター通信』第 66 号、2014 年 7 月 31 日、pp.10-15
榎森進「「日露和親条約」調印後の幕府の北方地域政策について」『東北学院大学論集　歴史と文化』52 号、2014 年、pp.17-37
関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易：アイヌ文化と内国化』吉川弘文館、2014 年 11 月 1 日
田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』清文堂、2014 年 5 月 29 日
谷本晃久「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報：一九世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた」『東京大学史料編纂所研究紀要』24 号、2014 年 3 月、pp.53-62
中村和之「蝦夷錦と北方の先住民族」『アイヌの工芸：東北のコレクションを中心に』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、2014 年 7 月 17 日、pp.112-117

中村和之「「北からの蒙古襲来」について：モンゴル帝国の北東アジア政策との関連で」『歴史と地理（日本史の研究246）』No.677、山川出版社、2014年9月20日、pp.1-14
檜皮瑞樹『仁政イデオロギーとアイヌ統治』有志舎、2014年1月
中村和之「中世・近世アイヌ論」『岩波講座日本歴史　第20巻：地域論テーマ巻1』岩波書店、2014年10月22日、pp.117-138
麓慎一『開国と条約締結』吉川弘文館、2014年5月1日
保谷徹「ロシアに持ち去られたフランキ砲の謎」東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく（中公新書2299）』中央公論新社、2014年12月20日、pp.90-94
森永貴子『北太平洋世界とアラスカ毛皮交易』東洋書店、2014年5月
I.A.サマーリン，垣内あと訳，菊池俊彦校閲，三宅俊彦・中村和之解説「サハリン州オハ地区出土の中国古銭コレクション」『出土銭貨』第34号、2014年8月、pp.95-107

2015（平成27）年
東俊佑「アムール川下流域住民の交易活動に係る物質文化資料について：2014年度ボゴロツコエ、ブラワー調査報告」『北海道開拓記念館研究紀要』第43号、2015年3月、pp.67-88
東俊佑「近世蝦夷地交易品ノート(2)：和人からアイヌへの交易品について」『北方地域の人と環境の関係史　研究報告』北海道開拓記念館、2015年3月、pp.47-96
東俊佑「サハリン全島一周に挑んだ日本人：間宮林蔵から50年後の世界」『環オホーツク（第22回環オホーツク海文化のつどい報告書）』No.22、2015年3月、pp.27-40
佐々木史郎「北東アジア先住民族の歴史・文化表象：中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39巻3号、2015年、pp.321-373
谷本晃久「近世の蝦夷」『岩波講座日本歴史　第13巻：近世4』、岩波書店、2015年3月27日、pp.68-102
永野正宏「19世紀前期の蝦夷地における疱瘡対策：種痘実施以前の在地社会を中心に」『北海道・東北史研究』第10号、2015年3月31日、pp.30-48
麓慎一「近世後期における北方の境界問題」『日本史研究』No.630、2015年12月、pp.24-39

2016（平成28）年
北海道史研究協議会編『北海道史事典』北海道出版企画センター、2016年6月18日
松本英治『近世後期の対外政策と軍事・情報』吉川弘文館、2016年9月

2017（平成29）年
東俊佑「『トコンヘ一件』再考：北蝦夷地ウショロ場所におけるアイヌ支配と日露関係」白木沢旭児編『北東アジアにおける帝国と地域社会』北海道大学出版会、2017年3月31日、pp.27-60
永野正宏「近世蝦夷地における種痘対策」『日本歴史』第824号、2017年1月、pp.102-117
麓慎一「19世紀後半における日露関係とサハリン島の諸民族（環北太平洋地域の伝統と文化(1)サハリン）」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31、2017年、pp.27-31
麓慎一「ロシアの環太平洋政策と日本」『歴史と地理（日本史の研究259）』710、2017年12月、pp.1-11
前田幸子「シーボルトから没収した『カラフト島図』：伊能図の筆跡との比較」『伊能忠敬研究』第

83号、2017年、pp.1-5

2018（平成30）年

赤羽栄一『未踏世界の探検者間宮林蔵（新・人と歴史拡大版28)』清水書院、2018年7月

東俊佑「『土人給料勘定』のしくみ（Ⅰ）：北蝦夷地ウショロ場所経営帳簿『北蝦夷地用』の分析」『北海道博物館研究紀要』第3号、2018年3月、pp.9-66

及川将基「18世紀～19世紀初頭のカラフトにみる民族の「発見」と境界」『比較文化研究（盛岡大学社会文化学会)』第28号、pp.17-29

谷本晃久「北の『異国境』：幕府外交の転換とアイヌ史上の画期」高埜利彦編『日本近世史研究と歴史教育』山川出版社、2018年3月30日、pp.100-141